ジェシータの楯

悠理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジェシータの楯

【Ｎコード】
Ｎ８５８６Ｚ

【作者名】
悠理

【あらすじ】
東京。一般の人間にはその存在が知れ渡っていない、政府の関係者や大財閥の人間しか知る事のない特殊ＳＰ機関『ジェシータ』。少年は世界最高峰の護衛機関に身を置く、史上最年少のメンバーの一人だった。
だがある日、少年は奇妙な出来事に遭遇し、『魔術』という新たな世界の法則に触れていく。
その先に見えるものは何か。少年はただ一つの楯としてそこに立つ。

プロローグ（前書き）

こんにちは、悠理です。
こちらの作品は以前公開していた『魔術記』という作品のリメイク作です。
設定の大幅変更がかなりありますが、前作から呼んでいただいている方はご容赦ください。
初めての方は今後ともよろしくお願いいたします。

プロローグ

東京都港区芝公園。
１９５８年１０月１４日竣工、同年１２月２３日に完工式が開かれた東京の観光名所の一つとして知られる、東京タワー。正式名称は日本電波塔。
７月中旬、すでに真夏の猛暑に突入している蝉のうるさい今日この頃。
東京タワーの傍らにて正式な会場が設けられ、今そこは一つの応援演説会場と化していた。
政治家、斉藤史孝（さいとうふみたか）は約３００人の支持者の前で小さなステージ上に立ち、マイク片手に現在の日本について、そして政治社会の現状について熱く語っている。大衆に向かって鼓舞、激昂できるその姿はさすがと言うべきか。支持率が高いだけの事はある、政治に興味のない自分でも思わず彼の話に耳を傾けてしまうほどであった。

『――――ねぇ、結城。結城ってば！　人の話聞いてる！？』

……これは決して、斉藤氏の台詞ではない。
片耳に引っ掛けているイヤホンから女の子の叫び声が響いて、黒髪黒目、中肉中背の少年、諏訪部結城（すわべゆうき）の意識はようやく現実に引き戻された。
演説の上手い政治家というのはちょっと困らせられるな、と結城は半分呆れながら考える。大して興味のない話だってのに、聞いてるだけで妙に引き込まれるというか、中毒性があるというか。いや

まあ、政治に興味がないのは確かだ。そんな無関係者の自分まで話の中に引き込むほど、あの斉藤史孝という中年太りのおっさんはよほど話が上手いのだろう。

『ちょっと結城！』

「ああ、ごめん。聞いてる聞いてる。……で、なんだっけ？」

『絶対に聞いてなかったでしょ……』

イヤホンの向こうで相手の女の子が溜息を吐いたのが何となく分かる。そんな面倒くさそうにされてもね。文句なら演説中の斉藤氏宛によろしくお願いします。

『……まあいいや。もう一度説明するから今度はちゃんと聞いててね』

「りょーかい」

通信相手の催促にま温い声で返す。

結城の軽い返事を聞いて相手の女の子は小さく咳払いをすると、

『今からスピーチが終盤に差し掛かって……せいぜい2分後ぐらいかな。この後は拍手会だから、ステージ周りにいるバリケード要員の警察がその場から離れることになってる。その時、ほんの数十秒ぐらいだけど斉藤氏の周りが完全にノーガードになるの』

「……えーっと、つまり？」

『鈍いなぁ。だからね？　もし犯人が斉藤氏の事を狙ってくるのな

ら、その数十秒が絶好のタイミングってこと』

「……ふむ」

大体の言いたい事を把握し、誰に向けてでもなくその場で頷く。
結城のその反応を知ってか知らずしてか、少女は軽く息を吸って続けた。

『犯人の使うものが、ナイフか、拳銃か、それとも別の何かかは特定できないけど……おそらく今犯人のいる場所は結城から見て右手。一番人だかりが多くて込みあってる場所だと思う』

少女の言葉に視線だけを右に向ける。
言われて気付くが、確かに。演説中の斉藤氏との距離が一番近い事もあってか、支持者たちの密集度がもっとも高い。自分の身を隠すのであればあの中に紛れる事がおそらく最良であろう。

『目視でも十分に分かるでしょ？　結城のいる位置からだと飛びだすのに少し時間がかかるけど、大丈夫？』

「無理、とは答えれないだろう？　これでも一応仕事な訳だし」

イヤホンから届く声に小さく返しつつ、結城は移動を開始する。人の合間合間を縫うように移動して、上手い事人だかりの最前列に体をすべり込ませる。前に飛び出す際、少しでも早く飛びこめるように位置取りをしておかなければならない。
バリケード要員の警察と軽く目があった。少し不審な視線を向けてくるが、結城の顔を見た途端に慌てて小さく一礼する。こういうのはあまり慣れてないんだけど……とりあえず結城も、首だけで礼を返す。

「綾羽（あやは）。残り何秒？」

『ん。せいぜい３０……いや、最後にシメがあるだろうから４５秒ぐらいかな』

残りあと数十秒。ぼーっとしてればあっという間な時間である。

「……そろそろ、か。悪い、集中するから通信切るよ」

『え？　ちょっと――――――』

相手の返答を待たず、結城はイヤホンのコードの先――――ポケットから一見ただの音楽プレイヤーにしか見えない端末を取り出し、軽く操作してイヤホンごとポケットに突っ込み直す。通信をこっちから一方的に切断するのはいつもの事だ、特に向こうのご機嫌を損なう事はないだろう。

それからすぐ、斉藤氏が演説のシメらしき言葉を口にして、周囲の人達から次々と拍手が湧き上がった。斉藤氏自身も頭を何度も下げて、支持者たちの拍手に行動で返す。とりあえず周辺に溶け込まなきゃならない結城も拍手だけしておいた。

やがて司会の人らしき男性が前に出てきてマイクを手に持つと、

『それでは今から斉藤史孝の拍手会を行います。皆様は是非ともステージ上へどうぞ！』

その言葉を同時に、バリケード要員の警察達がステージ脇へと引っ込み始める。

……そろそろ問題の拍手会だ。未だ誰も前へ踏み出そうとしないが、警察の方が完全に身を退いたら一斉にゾロゾロと歩み寄り始め

るだろう。一体どのタイミングで犯行を行うつもりなのか、こればかりは自分自身の眼力に頼るしかない。
だが。

「……ぁ？」

だが、予想以上に。
予想以上に、それは早く訪れた。
結城が視線を向ける先――――ステージ右手の人だかりの中。未だ積極的に動こうとしていない人々の中を、ただ一人、両手をポケットに突っ込んで前進している男が視界の隅に映った。

（……まさか）

男は一気に最前列まで躍り出ると、死んだ魚のような目でステージ上に立つ斉藤氏を睨みつけている。ただチラ見する程度では分からないだろう。男の顔を凝視していた結城は、男の向けるその視線に明らかな殺意が混じっている事を見逃さなかった。
結城の中で思考が入れ替わる。
スイッチを切り替える。

「――――ッ！！」

瞬間、その場で地面を思いっきり蹴り上げ、勢いよくその場から走り出す。
向かう先は男の元。だが一瞬判断が遅れたせいか、距離がやたらと遠く感じる。
男は上着のポケットに突っ込んでいた手を外に出し、その手中にあるもの――――おそらく『手榴弾』を取り出した。

（ンなものどこで手に入れたんだよ……！！）

頭の中で毒づきつつも、一気に駆け抜ける。もし手榴弾なんかがこんな街中で爆発したらただじゃ済まない。それを人に投げつけるつもりなのだ、斉藤氏みたいな中年のおっさん程度一撃で殺せてしまうレベルである。

男の手榴弾を持つ腕が振りかぶられる。周辺にいる数人の人々が彼の不審な動きに視線を向けているようだったが、ただの一般人である彼らに何か期待しても無駄なことだ。

だからこそ、結城がここにいるのである。

「させるかぁ！！」

腹の底から声を張り上げ、間一髪、結城は男の体目掛けて全体重のタックルをお見舞いする。かはっ、と男が胃の中の空気を吐き出したのが分かる。

そのまま両腕の手首を拘束すると、完璧に動きを封じてコンクリートの地面へと容赦なく押し倒した。同時に、周囲にいる人々が戸惑い混じりにざわつき始める。所詮彼らはただの一般人、まだこの男がテロ犯だということに気付けず、学生らしき男の子がいきなり大人の男性にタックルをお見舞いした、程度にしか思えていないだろう。

「っ、手榴弾は！？」

今の一撃、倒れた際に頭でも打ったのか。すでに気絶している男の手――そこに、手榴弾がない。

慌てて上空に視線を向けると、ピンの抜かれた手榴弾が空を舞い、ステージの手前付近に落下する直前だった。

完全に爆発するまでおそらくあと数秒。

結城は歯を食いしばり、両足に全身のエネルギーを収束させ、折り曲げた膝をバネのように思いっきり伸ばすと同時、まるで野球のスライディングキャッチでもするように両足で地面を蹴り飛ばした。
第三者から見たら、それは圧倒的身体能力と反射神経があってこその動きだっただろう。

（届け――――――！）

落下する手榴弾が地面にふれる一歩手前、合間に手を滑り込ませた結城がギリギリのところでそれをキャッチする。勢いに乗った体がステージのセットに激しく激突するが、今はその痛みに身をゆだねている暇もない。
倒れたまま、手榴弾を持つ手を思いっきり振りかぶり、全身の力を込めてその腕を振り抜く。
――――空へと。
そして、次の瞬間。

ドォォォオオオオン！！　という轟音が辺り一面へと響き渡り。
上空で爆発した手榴弾は小さな爆炎と激しい暴風を撒き散らして四散した。

思わず両腕で目を覆い、視界をシャットアウトしてしまう。それぐらい強力な衝撃が結城の元まで伝わってきた。
たった一個の手榴弾から巻き起こった爆発に、腕を下ろして辺りを確認するとすでにそこは喧騒に包まれていた。男性も女性も慌てふためき、爆音を聞きつけた野次馬も集まり始めている。大勢の人々が携帯で写真を撮っていたりコソコソと言葉を交わしたりと、大忙しである。
そんな中結城は小さく息を吐き出して、辺りに視線を巡らせる。そして手榴弾の爆発が人々の空気以外に影響を与えていない事を確

認すると、全身から力が抜け、今度こそ思いっきり息を吐き出す事が出来た。
上空に投げて正解だった。
ステージに炎が燃え移っている事もなく、傷を負っている者もおそらくいない。なんとか被害を最小限に食い止める事ができた訳である。
結城は、地面に仰向けで気絶している手榴弾を投げた犯人に対して一瞥して、
「――――お仕事完了」
ゆっくりと、呟いた。

１：特殊護衛機関『ジェシータ』

特殊護衛機関『ジェシータ』。
ロシア語で『守り』というその名の由来を持つ、世界でも数か所にしかない最高峰の護衛機関。その一つが、日本の東京都に在住する。
ごく一部の政府関係者や大財閥の人間しか知ることの許されない世界の裏事情。その一片を担うのがこの『ジェシータ』。
『ジェシータ』に所属する人間はみな、通常のＳＰとは違った特殊な訓練と技能を学び、依頼者から前払いの契約金を貰ってその身柄を期間内護衛する。彼らは『ガード』と呼ばれ、護身術とは違った、敵を本当の意味で殺しに掛る近接格闘術。政府によって特別に許された銃器、刃物の持ち歩き、それを使用した特殊な訓練。さらには高度な情報処理能力まで身につけ、依頼者を徹底的に守り抜くのが仕事だ。
政治家の演説中の警護から、総理の外出の際の警護、海外から訪れるＶＩＰの警護まで、その対象は様々。ただ一つ共通して言える事は、その誰もが命を狙われてもおかしくないほどの要人であること。『ガード』はそれらの犯行を幾重にも阻止してきた、政府に絶対的な信頼を寄せられる護衛機関というわけだ。
無論、世界の裏、その一片を担うだけあって『ジェシータ』の存在が公の場に知られる訳にはいかない。たった一つの組織の為に国の税金が莫大に動くことだってしばしば、もしそのような事を国民にでも知られたら国がどうなるか分かったものではないのだ。

――そして、１７歳。男。諏訪部結城（すわべゆうき）。
彼もまた、特殊護衛機関『ジェシータ』に身を置くガードの一人だ。
一般的な日本人らしい黒髪に、男性にしては大きめの瞳。少し細めの体の線を持つ彼も、見かけによらずガードとしての十分な技能を身に秘めている一人である。
まだ幼い頃、諸々の事情で両親を亡くした末に結果的に身を置く事になったこの組織。入った当初から肉体の構造を壊すようなおそろしい訓練を毎日のように受けて、未成年にも関わらず銃器の扱いには人一倍慣れている。
まだ学生の身分にも関わらず、すでに命懸けの仕事に没頭している結城はおそらく異常と言えよう。だが結城本人にしてみれば、そんな毎日が当たり前であり、大した苦悩もない。これが彼にとっての日常なのだ。

そんな若くして一人前のガードである諏訪部結城は今、東京新宿にデカデカと鎮座している高層ビル、『ジェシータ』日本支部の廊下を面倒くさげに歩いていた。
彼の向かう先は社長室……なのだが、この建物、相当の面積と高さを誇っているせいで毎度毎度目的の場所へ向かうのにかなりの時間を要してしまう。しかも『ジェシータ』の日本支部とか言っておきながら、１階から２９階までは全く別用途の建物。実際に『ジェシータ』本部となっているのは３０階から３５階の計５階スペースのみである。世界最高峰がこれなのだから少し哀れだ。
世間的にはあまり知られてはいけない組織なのだからひっそりとしているのも当たり前かもしれないが、もうちょっと豪遊してもいいんじゃないの？　というのが結城の見解である。

「ねぇ、綾羽（あやは）」

結城は隣を歩く少女――――自分よりも頭半個分ほど小さい背丈と茶髪のポニーテールをする女の子に、口慰めがてら言葉を向けた。
『ん？』と小さく相槌を打ってこちらに視線を投げて掛けてくる少女に、結城は得意げに笑って見せた。

「今日の俺、どうだった？　マジで格好良くなかった？」

「……自信満々のドヤ顔で言ってるところ悪いけど、いざって時に通信を切られてあたしはそっちの様子が何一つ分からなかったんだけど」

「……はぁ、残念だ。せっかく俺のイカしてる勇士を綾羽に見てもらいたかったのに、通信が切れてしまうだなんてっ！」

「自分で切っといてよく言うわね」

この冗談が言い合える仲の少女、橘綾羽（たちばなあやは）は結城と同様『ジェシータ』メンバーの一人である。
結城がこの組織に来た当初から仲良く接していて、今では幼馴染みと言い合えるほどの関係。小さい頃からこの組織に身を置いているらしく、サポートメンバーの一員としてガードをバックアップする役割を担っている。
物騒な組織で育まれた幼馴染み関係、というのも実に珍しいものだ。結城や、おそらく綾羽にとっても大して気にするところではないのだけども。

「……結局、犯人は手榴弾を使ってたんだってね」

唐突に綾羽が話を切り替えた。
犯人の使用した武器――――手榴弾。彼女はサポートメンバーとし

て後始末のために現場へ赴いていた。その時に他の誰かから耳にしたのだろう。

「そうそう、そうなんだよ。てっきり拳銃か何かだと思って、斉藤氏には事前に防弾チョッキを着ててもらったんだけど……どうりで犯人の奴、自信満々な犯行予告だったわけだ」

「あのメッセージは警察にかなり挑発的だったものね……」

先の応援演説会。実はその三日前に、犯人の男からと思われる犯行予告のメッセージが警察のほうに届いていたのだ。

結城と綾羽もそのメッセージに一度目を通したことがあるが……あれは酷いメッセージだった。警察に対して悪い思い出でもあるかってぐらい警察のことをコケにした文章を連ねて、斉藤氏の政治界でのやり方が気に食わないのか、斉藤史孝を徹底的に罵倒。挙句の果てには絶対に殺すとまで宣言してあった。

ただまあ、斉藤氏本人が『ジェシータ』に護衛依頼を出したのが犯人にとって最大の失敗だっただろう。ガード一人分の契約金と引き換えに結城が会場に派遣されたせいで、結果的に犯行は失敗。結城としては一言、ざまぁ（笑）と言わせてもらおう。

「ざまぁ」

「え？」

「いやなんでもない。結局のところあの手榴弾ってどこで手に入れたんだろうな。海外の通販か何かかな？」

「たぶんね。今はネットとそれなりの知識さえあれば何でもできる時代だし。そればかりは犯人の身元を調査してる警察のみぞ知る、

って奴だと思うよ」

本人はこう口にしているが、もし彼女が本腰入れて犯人のことを調べればあの男に関する情報という情報を知り尽くすことが可能だろう。

大した身体能力もなければ銃器に関する扱いも慣れていない綾羽が『ジェシータ』に身を置けている最大の理由が、彼女の持つ天才的な情報処理能力とハッキング技術だ。そこらのコンピューターに愛用のノートPCでハッキングを仕掛け、監視カメラの映像を盗み見したり個人情報を丸ごと奪い取ったりと様々な用途で『ジェシータ』のガード達をサポートする。

そんな天才ハッカーの綾羽が自分専属のサポートメンバーでいてくれるのだから、結城としてはありがたみを思えなければならない。事実、彼女が居なければ成功することのできなかった仕事を過去に何件も経験している。綾羽様々って奴だ。

「まあ何にせよ、今回も無事に終わって諏訪部さんはご安心ですよー」

「だね」

くどいようだが、『ジェシータ』での仕事は命懸けだ。一瞬の判断が命取りになる。いざとなったら自分の身を挺(てい)してまで要人を護るのが結城の役目。

規模の小さい仕事であれ、こうして無事に成功を収めることができただけで十分に名誉なことだ。まあ、名誉と言ってもガードの取った手柄は金になるだけで、世間的には『勇敢な一般人の活躍で～』とかの理由がこじつけられて公表される。そのため結城が世界的な有名人！　というレッテルを貼られることはまずあり得ないが。

「ああそうだ、綾羽。今日の晩飯、どこかで外食しないか？　どうせ報酬金も出るんだしさ」

「外食？　んー……」

結城の誘いに『んむむむ』とか難しい顔で唸る綾羽。なぜか意味もなく額に指を当てて考え込むポーズをとっている。

「どうかしたん？」

「いや……食べに行く場所によっては結構お金かかるだろうし、今月のスケジュールを……」

……お宅の家計簿はそんなに酷い有様なのでしょうか。

「なに？　そんなに家計厳しいの？」

尋ねるとますます難しい顔になる。

「うち、お父さんがお金遣い荒いから……。先月もタバコと弾薬とパチンコでどれだけのお金を無断に消費させられたか……」

「あぁー……」

一人暮らしの結城にその気持ちはよく分からないが、綾羽の父親とは結構な頻度で顔を合わせる。あの人の性格を考えれば何となくだか彼女の苦労が想像できた。

「別に無理に付き合う必要はないぞ？　余裕のある日にまた改めてさ」

「それはそうなんだけど……最近は結城と二人で食事することもなかったから……」

「？　なに、俺と食事することって何か意味あんの？」

「へ？　あ、いや、それはその……」

不意に顔を背け、なぜか恥ずかしそうに薄く頬を染める綾羽。チラチラと横目でこちらの様子を窺ってくる。

しばらくその行為を繰り返して、挙句の果てには『鈍いんだから……』とか恨めしげにボソッと呟いてくる。どういうことだろう？

ただ何となく分かるのは、彼女も外食には行きたいんだろう。結城はしばらく考えると、

「……じゃあ今回は俺の奢りにしよう」

「え？」

「なぁに、俺は一人暮らしで金にも余裕があるからね。たまには誰かにメシを奢るってのも悪くないと思ったのよ」

結城の言葉に綾羽はちょっとだけ驚いた様子で目を見開いた。

「……いいの？」

「綾羽がいいのなら」

「……んー……」

お金に困る人はその分お金の大切さが分かる、とよく言われるが綾羽はそれにしっかりと当てはまる一人。誰かに奢られるという行為に多少抵抗があるのだろう。
が、少し考えてすぐに踏ん切りがついたのか、綾羽は小さく微笑んだ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな。ごちになりますっ」

「あいよ。でも食べに行く場所は安いとこで頼むぞー」

「……どうでもいいけど結城って、上げて落としたりその逆だったりっていうの多いよね」

「いきなり何の話ですか」

素っ気無い廊下を歩きつつ、どこに行くかとかあこは不味いだとか話しながら目的の社長室へ向かう。
———そんなこんなで数分後、二人並んで社長室の前に到着した。社長室といっても大して飾りっ気のない扉に、中もそれっぽい机と書類を溜め込むいくつかの棚、あとは客人用のテーブルとソファーしかない。
そもそも社長室自体、『ジェシータ』の総長が業務関連の仕事をするだけの場だ。必要な機能だけを取り揃えたシンプルな部屋であり、それ以上でもそれ以下でもない。
ドアに軽くノックする。が、返事がない。仕方なく結城は中へ呼びかけた。

「総長、入りますよ？」

それでも返事がない。

少々戸惑ったが、容赦なく扉を開けることにした。別にあのおっさんに遠慮したところで何も出ない。
ドアノブを回し、扉を開け放つ。
———次の瞬間。

「ユウちゃーん！　お父さんが新しいお洋服買ってあげたから着てみてぴょーん！！」

……サングラスをかけたスーツのおっさんが、ひらひらのワンピースを持って突撃してきたのでとりあえず扉を閉めた。

「……」

「……あー、あの？　結城。お父さんのこと、無視しちゃってもいいの？」

「認めない。あんな奴が父親だなんて、俺は絶対に認めないぞ……」

と言ってもこのままでは埒が明かない。
一度気持ちを落ち着かせ、念のためにここが社長室であることを確認し、息を吐く。仕方なくもう一度扉を開いた。
すると先程のスーツのおっさんはなぜか床に四つん這いになって両手を突き、涙でも堪えるようにプルプルと震えていた。
おっさんは言う。

「うっ……うっ……ひどい！　ユウちゃんったらお父さんの好意を真顔で無視するなんてっ！　これが親離れなの！？　ううっ、そんなの認めたくないっ……！」

「息子としては主にあんたの趣味を認めたくないよ。ていうか何でいきなり女性物のワンピースなんか持ち出して来るんだよ……」

「もうっ！　恥ずかしがっちゃって！　さっき言ったでしょう？　お父さんがわざわざ買ってきてあげたに決まってるじゃない！」

「とりあえず精神科に行こうか」

空っぽな頭してるだろ……？　こいつ、４０代の男なんだぜ……。

真っ黒なサングラスを掛け、同じく黒いスーツ。短い髪をホテルマンのようにアップで固め、一見ヤクザの頭にでも見えそうなこのおっさんこそが、認めたくないものだが特殊護衛機関『ジェシータ』の総長である。

本名は諏訪部正臣（まさおみ）。……言わずとも分かるだろうが、結城の父親である。

先に釘を刺しておくが、血の繋がる実の父親って訳じゃない。結城の本当の両親は幼い頃に二人とも亡くなった。今ここに居る『親父』は、両親が亡くなった際に結城を引き取ってくれた義理の父親という意味だ。

幼い頃の結城に近接格闘術と銃器・刃物の扱いを教授してきたのもこの人。色々と訳ありだった結城を自分の家族として迎え、わざわざ『ジェシータ』での仕事のため結城を育て上げた過去は彼がよほど寛大な心の持ち主であることを納得させる。

……のだが。

「ほら、ユウちゃんって結構女顔じゃん？　体も少し細めだし。だから絶対に女装が似合うと思うのよ」

「そのユウちゃんって呼び方やめてくれませんか。それと俺は列記

とした男でして、女顔とか言われるのは不本意……」

「だから照れないのっ！　騙されたと思って着てみなさいな！」

「……」

年の割りにやたらトーンの高い声で、人の話に耳を貸さず女装をせがんでくる総長の姿はただの変態クソジジィにしか見えない。義理とはいえ、息子としては頭を抱えてしまう家庭的問題だ……。

「ねぇ、綾羽ちゃんもそう思うだろう？　ユウちゃんには絶対に女装が似合うって」

「え？　あ、あたしですか？」

突然話を振られた綾羽が戸惑いがちにあたふたし始める。たぶん苦手なんだろうな、この人との会話……。

まあ、それを言うならこの『ジェシータ』内に苦手じゃない人なんていないと思うけど。

「ま、まあ、確かに結城の顔は、格好いいというより可愛いに部類されると思いますけど……目もちょっと大きいですし……」

「そこ！　真面目に答えないでよろしぃ！　そんなこと言うとこの人はすぐ調子に乗って……！」

「だよね！　やっぱりそうだよね！　綾羽ちゃんもそう思うよね！　ほーら見ろやっぱユウちゃんには女装の才能がある！　お父さんの目に狂いはなかった！！」

「ほ、ほら見ろ……。大体あんた、少しは自分の歳を考えろ！　歳を！」

「見た目は大人。頭脳は、」

「うるさい黙れ！　ああちくしょう、これじゃ全然話が進まないんだけど！」

少しずつカオスと化してきた場の空気の中で、何一つ空気を読まずにぎゃあぎゃあと事態を悪化させていく『ジェシータ』の最高権利者。

今更だが、目の前の親馬鹿が実は物凄く護衛のプロで、とんでもない実力の持ち主だったりすることを誰が信じられよう……。なんだかんだ言っても、一応は組織内トップの人間なのだ。

――――それから数分、しつこいほどに女装をせがんでくるバカ親父をようやく落ち着かせる事に成功する。その間実力行使に走った総長が無理矢理に結城の服を剥ぎ取ろうと突撃してきたり、何とくタンスを開いたらワンピース以外の女性物の服が大量に溢れてきたりと大変だったのだが、その辺は割愛しておこう。

「はぁ……総長、少しは真面目に仕事らしいことをしてくださいよ……」

「パパって呼んでくれなきゃ相手しない」

「もう帰って良いですか？」

「いやーん！　もっとパパに構ってよユウちゃぁーん！！」

駄目だコイツ早く何とかしないと。

というかこれじゃ、いつまで経っても話のサイクルがループするばかりだ……。

「総長、いい加減に本題へ移りましょうよ」

「ん？　本題ってなに？」

「ワンピース持ってスタンバイしてるぐらい人のこと待ち構えていたくせしてその言い草かよ！　少し頭の中クリーニングしてこいよバカ親父！」

「し、仕事の報酬を貰いに来たんですよ。総長」

あとから綾羽が補足を付け加えてくれる。その言葉を聞いてようやく理解したのか、それとも思い出したフリでもしたのか、総長は『あっ、そういえば』みたいな顔で表情を愉快に輝かせ、ポンと手と叩いた。

「そうならそうと最初から言ってくれればいいのに。本当にもう、ユウちゃんは怒鳴ってばかりなんだから」

怒鳴らせているご本人に言われると物凄く腹が立つもんなんですね。

結城がこめかみをピクピク震えさせ怒りのパラメーターを踏み留めている中、総長は業務用のデスクの元まで戻ると引き出しを開き、中から『ユウちゃん（♀）』と『橘　綾羽』の名前が記された封筒をそれぞれ1つずつ取り出す。報酬金として依頼主から貰ったお金を、ああいう風に仕分けしておくのも総長の仕事なのだ。

「ほら、これが今回分の給料」

「……明らかに悪意の感じるこの名前には、ツッコミなしの方向性でいいんですよね？」

結城と綾羽、互いに封筒を手渡してもらう。封筒の重み的にあまり金額は入っていないのだろうが、せいぜい１０万はあるだろう。綾羽の奴に限ってはさっそく封筒の中身を覗いて目を輝かせている。

……ただし、１０万と言っても実際にプライベートで使えるお金はこの半分も満たない。綾羽のようなサポートメンバーはまた別だろうが、ガードの場合はいざという時のために使用する自分用の銃のお手入れと、新しい弾薬を購入するだけでかなりの金額を犠牲にする。もちろんその行為自体は個人の自由なので別にやらなくても構わないのだが、大事な仕事の最中に『手入れ不足で銃がジャムってしまい要人を守れませんでした』という言い訳は通用しない。いつでも万全に、些細なことのようでかなり大事なのだ。

「二人とも、今回の仕事は上出来だったぞ。特にユウちゃん。斉藤史孝氏がユウちゃんの活躍をべた褒めしてくれてパパは嬉しい限りだよ」

「そうですか。依頼主が満足してくれていたなら光栄ですよ。それと一人称『パパ』は気持ち悪いからやめてください」

給料のお金を十二分に堪能し終えたのか、綾羽が横から顔を覗かせてくる。

今に限った事じゃないが、こう近くで顔を見るとやっぱり可愛い顔してるよな、こいつ。

「しかし結城は凄いよ～。ちょっと前までは訓練続きだったのに、今じゃ一人前のガードだもんね。ハッキングしか取り柄のないあた

しとは大違いだよ」

「それは綾羽がいてこそだよ。そのハッキング能力がなきゃどうにもならなかった仕事は今までにいくらでもあったし、綾羽のサポートにはいつも頼りっぱなしだし。感謝もしてる」

言うと、綾羽は少しだけ頬を上気させて小さく笑みを浮かべた。

「えへへ……そう？　ありがとう」

「まったく、さすがユウちゃん！　女の子に媚びへつらう能力も人一倍なんだから！　パパってば誇らしいっ！」

……そしてこの人は、いつまで経っても頭の中にスポンジが詰まっているらしい。

と、総長は不意にスーツの内ポケットに手を突っ込むと、中から一枚の折りたたまれた用紙を取り出す。それを広げつつ、変わらぬ調子で口を開いた。

「で、唐突なんだが……早速、明日から別件の仕事に向かってほしいんだよね。二人が了承してくれるなら、だけど」

本当に唐突な話題変換だが、この人が部下に仕事を回してくるときは大体いつもこんな感じだ。綾羽共々、少しだけ表情が引き締まる。

「どんな仕事ですか？」

「んー、まあとりあえずこいつを見てくれ」

総長は二つ折りにされていたＡ４用紙を表に向け、結城に向けて差し出してくる。
そいつを受け取り、隣の綾羽と顔を覗かせて文面に目を通した。
「……？　なんですかこれ、ただの個人情報書類ですか？」
用紙に描かれているのは、見覚えのない女性の顔写真と、おそらくその女性のものであろう名前や年齢、住所に電話番号、あとは個人の履歴などが箇条書きで記されている。
簡単に言うなればその人物の細かい個人情報と過去の履歴が軽く纏められた一枚の紙だ。警察でもまともに扱う事のできない重要なブツだが、『ジェシータ』のような機密機関ならそれを容易に発行することができる。総長本人が必要だと判断し、その手のルートで手に入れた書類なんだろう。
「あっ！」
すると隣から覗いていた綾羽が驚きの表情と共に声を上げた。
「見覚えある顔だと思ったら、この人ヘンリー＝マンゼルだ！」
「？　なんだ綾羽、知ってるの？」
「知ってるも何も、海外発端にも関わらず最近日本でも人気の出てきた有名なアイドル歌手だよ。ていうか結城こそ知らなかったの？　かなり有名なのに」
「うっ……」
普段からあまりテレビや新聞に触れていない結城としてはそう言

われても困ってしまう。そもそも、アイドルだの何だのってのに興味を持っていないのが最大の要因だと思う。
改めて書類の文面に目を通してみた。
名前はヘンリー＝マンゼル。女性。年齢は２４。当たり前だが未婚だ。外人らしく作りの細い顔の輪郭に、白い肌。透き通るようなライトブルーの瞳が似合う、ウェーブがかった金髪の女性。なんて言うか、初見なら誰しも彼女のことを『美女』だと評するだろう。それくらい綺麗な顔立ちをしている。
学生時代の頃から音楽、俳優関連の専門校へ通っていたらしく、大学を出てすぐにアイドル事務所へ就職。他二人のアイドルとユニットを組み、当初は人気の乏しいグループとして活動していたらしい。が、その数年後、ユニット内の彼女だけが爆発的に人気を獲得し、今では個人のアイドル歌手として出身のアメリカを中心に活動中だそうだ。
それらの人気は現在、アメリカ以外の海外にも浸透中であり、綾羽の口ぶりから察するに日本でもそれなりに有名なんだろう。
結城は書類から顔を上げると、眉をひそめつつ総長に訊ねた。

「……それで、この人が何か仕事に関係が？」

「うむ」　総長の頷きは早い。「要点を先に述べれば、先日そのヘンリー＝マンゼルからウチ宛に依頼が届いた。明日の午後に開かれる特別コンサートで我々に警護を頼みたいそうだ」

「警護……？　でもこの人、海外にいるんですよね？」

まあ当たり前の疑問だ。
いくら『ジェシータ』の特別権限を振るっても、今から海外へ飛び立ってアメリカに上陸、そこから彼女の元へ向かい依頼を遂行するというのは多少無理がある。

しかしその不可解な疑問に答えたのは、以外にも隣で話を聞く綾羽だった。

「結城ってホントにそういうのは何も知らないんだね……」

「ぇ、え？」

綾羽は呆れたように一度息を吐くと、

「昨日……あれ、一昨日だったかな？　まあどっちでもいいや。このヘンリー＝マンゼルがコンサートを開くために、わざわざ日本に来てるんだよ。ニュースで大々的に取り上げられてたじゃない」

「……お生憎様、そういう世間的な事には乏しい諏訪部さんでありまして」

「はぁ……確かに結城の仕事柄、そういうのは別に詳しくなくても大した障害にはならないんだろうけど……。まさかウチに仕事を依頼してくるとは思ってなかったなぁ」

じゃあ綾羽の役職的には必要なのか？　というどうでもいい疑問は今は置いといて。

「って事は、要するにそのコンサート中、彼女の護衛につけば良いわけですよね？　でもなんで俺達に？」

まあ、当然の疑問だろう。秘密裏の『ジェシータ』だって人手が過疎っているわけではない。別に結城らに頼まなくたって、もっと暇してるガードの連中はいるんじゃないのだろうか。

よりにもよって今日仕事が終わった結城と綾羽に、明日決行の仕

事を頼むことはないと思う。総長はそもそも自分の部下にそういう無理を強いるタイプではないのだし。
当の総長は結城のそんな疑問を事前に分かっていたようにスラスラと答える。
「ヘンリー＝マンゼルから依頼の電話をもらったのが不自然なくらい急すぎてな……。あまりに突然すぎて他のガードがほとんど出払っているんだ。明日から完全にフリーってのが二人しかいないんだよ」
「突然って……いつ連絡がきたんですか？」
「今朝」
確かに突然だ。
「……それは急すぎますね。そのコンサート中に何かやましいことでもあるんでしょうかね？」
「さぁ、そこまでは分からん」　総長は黒光りするサングラスを軽く掛け直しつつ、「ただ、私達の仕事は依頼者の身柄を徹底的に守り抜くことだ。彼女に依頼を申し込まれ、契約金を受け取ったからにはうだうだ言ってられん。仕事は仕事だからな」
「はぁ……」
曖昧な返事を残しつつ、手元にあるヘンリー＝マンゼルの個人情報書類をぼんやり眺める。
別に仕事を断る気は無い。
少し気分が乗らないところもあるが、だからと言って仕事を疎か

にするほど結城も体たらくではない。隣の綾羽も同じだろう。何も断りの言葉を口にしないからには仕事を請ける気でいるんだと思う。むしろ彼女に関しては、超有名アイドル歌手に会えるって時点で多少瞳が輝いている気がする。

「ま、肩を軽くして護衛に当たればいいさ。二人の他にも応援で一人その護衛に当たることになってる。そう気負うことはない」

「了解」

総長がああ言ってるんだ、たぶんそこまでキツイ仕事ではないのだろう。

何も言わないということは、今日の斉藤史孝氏のように殺人予告があったわけでもなければ、何らかの危機に瀕しているわけでもない。単純に依頼主の安全保護のために雇われた仕事だ。何も起こらない事を祈りつつほどほどに警護に当たればいいだろう。

綾羽が肩をつんつんと叩いてくる。振り向くと、彼女は胸の前で小さくガッツポーズを作って見せた。

「結城、がんばろうねっ」

「おう。無理しすぎない程度にな」

綾羽はどうもやる気に溢れているらしい。そんなにこのヘンリー＝マンゼルとやらに会えるのが楽しみなのかね。

総長は二人の様子に満足げにうんうんと頷くと、

「とにかく今日はお疲れ様。二人ともよく頑張ったぞ。明日までゆっくり体を休めとくんだぞ」

「はい。じゃあ失礼します」

「総長もお疲れ様ですー」

礼儀として軽く挨拶を残して、綾羽と社長室をあとにするべく総長に背を向けた。

が、

「ああそうだ、ユウちゃんユウちゃん。最後に一つだけ頼みたいことがあったんだ」

まだ何かあるのか、と足を止めて首だけで後ろに振り向くと、総長はガバッ！！！！　というとんでもない猛スピードで懐から何かを取り出した。

それはとても長く綺麗な黒髪で、生え際らしき中心点から流れるように垂れ下がっている、まるでカツラのような……、

「女物の服が駄目ならせめてウィッグを被ってくれるとパパはすごく嬉しいかもッ！！」

「人に休ませる気さらさらないだろテメェ！！」

◇

夜の東京は、その景色だけでも神秘的なものになる。
空は青黒く染まり浮遊する雲の輪郭すらも分からぬほど淀んでいるにも関わらず、地上では高層ビルや数多くの建物によって色とりどりに光り輝き、車道を走り抜ける多くの車と道行く道を行く人々で街はにぎわいに溢れる。
だからこそ日本最大の都会であり、東京都らしさなのだろう。それらが全て人工で作られ自然を破壊したものであっても、これにはこれでしか手に入れることの出来ない別種の神秘というものが隠されているのだ。
そんな中、とある小さなビルの屋上――――。
無骨なコンクリートの地面を踏みしめるように、街の中心に二つの人影が浮かび上がっていた。
そこからは明らかに周囲の空気にぞぐわない、異様な雰囲気がジワジワと漏れ出している。何か、とは言えない。まるでその一点のみ別次元のように、そこだけが異世界を作り出しているように、周りの空気を喰い殺しながらその場に君臨する。

「――――明日だっけ？」

なだらかな風に長い黒髪を揺らす小柄な少女が、夜の街並みを見下ろしながら口を開く。
車のエンジン音や風の産声に掻き消されそうなその小さな音を、しかし隣に立つ長身の男は一字一句聞き逃すことなく聞き入れた。
「ああ、間違いないよ。明日の昼過ぎ、近くの葛西臨海公園という場所で標的のコンサートが開かれるはずだ」
男の声はやわらかい。だけどその裏には、しっかりとした鋭い芯と自己主張が見え隠れしており、少女の耳までハキハキと言葉が届いてくる。

「その時が、もっとも狙いやすいタイミングってこと？」

「みたいだね。依頼主から共に提供された情報でしかないけど、確証が取れている。ソースも確実だ。間違いはないだろう」

聞き入れた少女は小さく頷き、しばらく自身の意識をおぼろげに漂わせる。

そして今ここにきた理由と、自分のやるべき事。それらを照らし合わせ、浮遊させ拡散させた意識と目的とを改めて固定した。

「迷いはないかい？」　隣に立つ男がさりげなく口にする。「キミはまだ若い。確か『この類』の依頼をこなすのも今回が初めてだろう？　本当は辛いんじゃないのか？」

男の言葉に、僅かながら考えさせられるところはあった。

迷いがないかと聞かれれば無きにしも非ず、自分にはまだ早いんじゃないのかとか、どう理屈を並べたって残酷なことに変わりはない。だけど自分から名乗りを上げ、しっかりと引き受けたからにはそれを全うする義務がある。

今更退く訳にはいかない。

「……大丈夫。私だってもう素人じゃない。他のみんなに合わせるのは当たり前なんだから」

「そうかい？　だけど……」

「大丈夫」

少し強調して男の言葉を制止する。それはまるで自分自身にも向

けられているような気さえ覚えさせた。
少女の言葉に何かを受け取ったのか、それ以上男が少女の心配を口にすることはなかった。
夜の街並みへ降ろす視線を一度離し、上空へと視線を注ぐ。街からの降り上がる光のせいか、星も、月も見えずに相変わらず真っ暗な夜空が東京都の真上に鎮座していた。それを忌々しく思うわけでもなければ歓迎するわけでもなく、少女は無心でじっと視線を送り続ける。
そして、一言。少女は口にする。
自分たちが狙う標的の名を。あらゆる迷いを取り除いて、やるべき事柄を脳内で形成し直すように、『殺すべき』相手の名を。

「――――ヘンリー＝マンゼル……」

一つの世界には、何十、何百、何万、何億もの『線』が世界の振興と共に一つ一つの道を辿っていく。
それらは本来、互いが交わることがなく、平行した道を進むことによって自分自身を成長させ、いずれ孤独に消えていく。
だが、ごく稀に。
本来交わることのない、交わるべきではない二つの『線』が交差し、世界の均衡を揺らすことがある。それはどこにでもありそうで何気ない現象の一つだったとしても、確かな意味をその中枢に秘めている。

これは、未だ何も知らない少年と少女。
何とも交わらない二つの『線』が、屈折し、互いの道に干渉する。
たったそれだけの物語――――。

2：特殊護衛機関『ジェシータ』

翌日。

東京都全体の左端に鎮座している『葛西臨海公園（かさいりんかいこうえん）』は、数多くの人々によって賑わいに溢れていた。

公園内には水族館を始め、レストランや出店、ホテル、挙句の果てには観覧車まであるという小さな遊園地っぷりをか持ち出しており、東京都内でもそれなりに有名なスポットとなっている。特に葛西水族館に関しては、建物前の『空の広場』という大広間から葛西渚橋や富士山、東京ディズニーランドなどが眺めれる絶好の箇所であり、ドーム上の建物の外壁八割がガラス張り、中にはしっかりとした大水槽があるなど水族館としての機能も十二分に揃っている。

なんら特別な日でなくとも、観光客や一般客が大勢いる場所。それがここ、葛西臨海公園だ。

そして本日、7月中旬の真夏真っ盛り。

学生や世間的には休日、一部の会社勤めの人にとってはむしろ忙しい日曜日。

葛西臨海公園内にあるホテル『シーサイド江戸川』のすぐ手前、そこにあるアスファルトの大きなスペースは今、普段以上の賑わいを見せつつあった。

理由は明確としている。今から数時間後、海外で活躍中の女性アイドル歌手ヘンリー＝マンゼルの特別コンサートが開催されるからだ。

外人歌手ということもあって少しばかりマイナーな部分があるせ

いか、日本の有名歌手のコンサートに比べたら大した人の賑わいではないのだが、それでも大勢であることに変わりはない。開催前の現在でも、数百人の人々が事前に設置されていた大きめのステージ前に溢れかえっている現状である。
しかも屋外ステージなだけあって入場だのなんだのという概念が存在しない。故に、ヘンリー＝マンゼルの歌を聴きたいならタダで聴けるという訳になる。それが合い重なって、現在進行形で近くに群がってくる人の波が止むことがないのだ。

（人が無駄に多いのって苦手なんだよな……）

そんな中、観客達の溢れかえる場所とは正反対、コンサートの準備を進めているステージ裏に結城はひっそりと佇んでいた。
音楽機器を運んだり、カメラの調整を行っているスタッフの方々をぼんやりと眺めながらつらつらと考える。

（障害は多いし、いざって時に動きにくいし、もしかするとその中に敵のグルがいたりするかもしれないし……対して良いことはないよな）

考える事は無論、これからの仕事についてだ。
昨日、斉藤史孝の護衛依頼を終えてその報告に行った際、ついでに貰った新たなお仕事。今からここでコンサートを開くヘンリー＝マンゼルの護衛。特殊護衛機関『ジェシータ』の一員としては、仕事前にあらゆる危機的状況を脳内で想定し、その際どういう風に対処するのかインスピレーションをしておかなければならないのだ。
が、やはり一般の人間が多いというのはどう物事が運んでもデメリットにしか働かない、と結城は思う。
動きにくい、音が聞き取りにくい、危険を察しにくい、武器が使えない……。

メリットに働くことなんて何一つないのだ。

（しいていうなら自分の身を隠しやすい、だけど……それは敵にも言える。プラマイゼロじゃ意味がないんだよね）

それに反し、敵側からしてみれば好都合のバーゲンセールだ。

いくら暴れようが目的を達することさえ出来れば言い訳だし、自分のみが危険になった場合いざとなったら一般から人質を取る事だって可能である。例えば先日の斉藤史孝氏の演説。犯人は周囲のことなどまったく気にすることなく、一撃で莫大な被害を齎すことの出来る手榴弾を行使した。

もしあの時、周囲を囲む人々がごく少数であったら。斉藤氏の支持率が低かったら。

結城がわざわざ無理して手榴弾を上空へ投げ飛ばす必要もなく、そもそも犯人を見つけるのに遅れを取らず、手榴弾のピンを抜かれる以前に拘束することができた。

人が多いってのは、まさしくハンデを負うようなものでしかないのだ。

（それを言い訳にしてたらいつまで経っても三流ガードに留まるんだけど）

ガードというのは、いつでも護る側の存在。要人の楯でしかない。その存在意義は決して剣ではないため、後勢に回るのは当たり前のことだ。こんなことでいちいち悩んでいることをあの馬鹿親父にでも知られたら、即座にネタにされて弄繰り回されるに違いないだろう。

まあ、今回の仕事は比較的安全だとは思う。馬鹿でもあっても、知識の持っている馬鹿親父も言っていたことだ。今回は犯罪予告があったわけでも、ヘンリー＝マンゼル自身が物凄いＶＩＰというわ

けでも、大富豪のご令嬢というわけでもない。他より少し有名なアイドル歌手、ただそれだけ。
今回の依頼も彼女自身の安全保護でしかないため、そもそも『敵』と判断すべき者が現れる可能性もごく僅かでしかない。特に注意することもなく、気軽に行えばいいのだろう。

（つーか、ただの保身でガードを雇うってのも珍しいよな……。よほど金にあまりがあるのかね）

なんとも魅惑的な話だ。
ガード一人を雇うのに数十万の契約金が必要だというのに、安全に安全を重ねるためだけにいっぱしのガードを雇うなどと……普通のＳＰを雇ったほうが明らかに安くつくことが分かりきっているにも関わらず。
その金の余裕、少しぐらい分けて欲しいもんだ。
小さく息を吐いて、深く考えるのはそこで中止しておく。改めて周囲の光景に視線を移した。
今結城は、ステージセットの裏に背中を預けてぼーっとしているのだが、正直なところこうしている事が少しずつ辛くなっている頃合であった。
なんたって結城の周りにいる人はみな、働いている。デカイ荷物運びからただの打ち合わせまで、もちろんのこと労働の差はあるがまったく動いていないのは結城だけなのだ。
そもそも結城がここに立っていれるのはヘンリー＝マンゼルの雇ったガードの一人であり、おそらく事前にそのことを聞いていたのであろう。
ここにいる人達は結城に対して妙に頭を下げがちだ。無論ガードの存在については公にできないため、『物凄く偉い人』とでも情報を受け取っているのだろうが……相手は見た目年齢学生の少年だぞ。というか実際に１７歳だぞ。少しは疑ってくれたほうが気分が楽な

んだが。
試しに結城のいる方向へ視線を送っている一人の男性と無理矢理目を合わせてみる。
大慌てで頭を下げ、別の作業へ移ってしまった。
さっきからこの調子なのである。

（……居心地が悪いなう）

ぼそっと心の中で呟いて、溜息を吐き出す。自分の将来的に、誰かの上に立つことはできないだろうなとかちょっと心配してしまう。仮に立ったとしても部下に任せることが出来ず、自分で率先して行動してしまう熱血社長さんにでもなってしまいそうだ。

（もし俺にも親父みたいな貪欲っぷりがあれば心配なんて必要ないんだろうけど）

あの父親とは実質血が繋がっていないため仕方ないのだけども。
本当の父親がどういう性格だったのかはあまりにも昔のことすぎて記憶が曖昧なのだが……少なからず今の父親みたくはっちゃけてはいなかったのだろう。
――と、そんなことを考えている最中、隅の方で準備を進めていたスタッフ達が小さく騒ぎ始めた。
何かと思い、その周辺にいるスタッフがそちらへ視線を向ける。
結城もめんどくさげに振り向いて――ようやく、本日の主役が到着したようだ。

「おはようございます」
「ヘンリーさん、おはようございます」
「おはようございますー」

スタッフ各々の挨拶に対し、小さく頭を下げて答える女性。
ヘンリー＝マンゼル。
ウェーブがかった金髪に、外人らしい碧眼。驚くほど細い体に長い足。肌は白く、まるでボディーソープのコマーシャルにでも出てるようなキメのよさだ。今はノースリーブのワンピースのような白い服を着こなし、腰に革のベルト巻いている。おそらくコンサート用の衣装なのだろう。
彼女は周囲に輝かしいほどの笑顔を振りまきながら、辺りに視線を巡らす。まるで何かを探してるかのようだ。その後結城と真正面から視線が合うと、一直線にこちらへ歩いてくる。
……って、俺？
ヘンリーは結城の目の前まで歩み寄ると、

「ハロー。あなたが頼んでいたガードの方かしら？」

「え？　あ、っと……」

結城にしか聞こえない程度の声量で口を開き、尋ねてくる。あまりにも突然だったため、つい動揺して言葉を詰まらせてしまった。
誤魔化すように慌てて咳払いをすると、軽く営業スマイルを作って結城は言う。

「……はい。今回の護衛依頼のため、『ジェシータ』より派遣された諏訪部結城です。本日はよろしくお願いします」

「あら、ご丁寧に。こちらこそヨロシク。知ってるだろうけどヘンリー＝マンゼルよ」

そういって、思わず見とれてしまいそうになるほどの笑顔を浮かべるヘンリー。まさに美女の鏡とでも言ったところか。金髪碧眼恐

るべし。それとおっぱい大きい。
しかも物凄く軽快な日本語だ。まるで最初から日本に住んでいたんじゃないかってぐらい自然な質感である。おそらく彼女自身が自力で覚えたのだろうが、日本語は他国の言語と比べかなり難しい部類に入る。よほどの学習を得てこの自然な喋りを身に付けたのだろう。それとおっぱい大きい。
つまり何が言いたいのかというと、
……。
おっぱい大きい。

「あなた、随分と若いのね。いくつ？」

まあ気になって当然であろうことをヘンリーが尋ねてくる。他のスタッフ達は結城が物凄く偉い誰かかと思っているので聞けなかったのだろうが、彼女には関係ないのだろう。
しかしどう答えたものか……まさか未成年が護衛につくとは思っていなかっただろうし、答えようによっては依頼主からの信用を失墜して護衛がかなり困難なことになりかねるぞ……。
必死に頭をフル回転させた結城は、

「に、にじゅうご……」

「ふふ、別に嘘はつかなくて良いわよ？」

バレただと！？
いや当たり前か……さすがに２５は無理があるよね……。

「じゅ、１７です……。一応、ガードと学生を掛け持ちしていまして……」

結城の苦し紛れの馬鹿正直な回答に、しかしヘンリーは「まあ」と軽く驚くだけで特に拒否反応を見せることはなかった。それどころか、

「そんなに若いのによくガードみたいな仕事を続けられるわね……。危ない仕事なのに大変じゃない？」

……なんていう、母性染みたことまで聞いてくる。どうとも思わないのだろうか？　未成年の少年なんかに自分の安全を任せるという行為が。もし結城がその立場ならかなりの不安を抱くかと思うのだが。

よほど包容力がある人格をしているのだろう。このヘンリー＝マンゼルという女性は。

「……大変ですけど、一応この仕事に生き甲斐を感じてはいますので。もちろん正直なところでは諸々の事情で仕方なく、という部分もありますけどね」

「そう？　でも、普通に学生をしてみたいとは思わないのかしら？」

「どっちかと聞かれれば、思いますね。でも……マンネリ？　ってやつですか。今更自分が辛いとか不運だとか思いませんし、こういうのが当たり前だと思い込んでる部分がありますから」

結城の言葉に何を思ったのか、ヘンリーは一度間を置きつつ何かを考える。

が、それからすぐに元の優雅な微笑みへ戻ると、不意に結城に向けて片手を差し出してきた。

「……？」

「日本ではこうするのが当たり前なんでしょう？」　ヘンリーはさも当然のように、「アメリカの方では性別関係なく抱き合ったりするのが一般的な挨拶だけど、そういう事したらキミ、すぐに顔を赤くしそうなタイプだからやめておくわ」

ふふ、と悪戯っ子みたいな微笑を浮かべるヘンリー。

そんな事言われちゃったらむしろ『抱き合いたいです！』と大声で宣言したいぐらいなのだが、んなこと言って本当に抱きつかれたらパニックに陥ってしまう。本音は喉の奥で留めて、ヘンリーの綺麗な手を握り返した。

「キミ、結構面白そうな子だわ。時間があったら一度お茶でもしたいぐらいね」

「は、はぁ……」

なんか気に入られてしまったっぽい。どこにそんな要因があったんだろう？

それともヘンリー＝マンゼルは根っからこういうタイプなのか。だからこそ多くの人気と信頼とを勝ち得て、今ある地位まで向上してきたのかもしれない。

握手を交わした手を互いに引っ込め、ヘンリーはなにやら集団で固まって話し込んでいるスタッフの集団に視線を送ると、

「……それじゃあワタシはこれからの打ち合わせがあるから。今日一日、よろしく頼むわね」

「ぁ、はい。本日はよろしくお願いします」

結城が軽く頭を下げるともう一度だけヘンリーは微笑み、身を翻して歩いていってしまった。
その背中を見つめて、結城は思う。
年上の女性って良いよね。

◇

それから数十分後、総長兼結城の父親の言っていた応援のガードがようやく到着した。
相変わらずセットの裏に背中を預けつつ、年上のお姉さんタイプってたまらないよねおっぱいとかおっぱいとかああでも貧乳も捨てられないなちっちゃい女の子ってのも実に魅惑的でたまんない、などとある種の現実逃避を行っていた結城の肩がトントンと軽く叩かれて、その者の到着に気付くことができた。

「おう、結城。元気してるか？」

意識が現実に戻り、声の方向へと振り向くと、

巨大なライフルを背負っているいかついおっさんがそこにいた。

「かーっ、相変わらず可愛い顔してんなぁお前。しかしそんな童顔しといてとんでもない鍛え方してるんだから物騒な奴……」

「物騒なのはあんただよ！！　なんてもん背負って平気で歩いてんだ！　少しは常識とか考えたらどうなんだよ！」

「？　なに怒ってんの？」

「無自覚！？　そんだけ形相なもん持ち歩いといて無自覚！？　おかしいだろ普通周りの目線でいけないことだって気付くだろほら見ろよ明らかに周りの人間引いてるだろ！」

「ああ、そういやここに来るまで妙に見られてたなぁ……。オレそんなに有名人だったのか？」

「ちげーよ！　ナチュラルにボケ構してんじゃねーよ！　とにかくそれ外してどっか置いて来い！　このままじゃ警察呼ばれてコンサートどころじゃなくなるだろ！」

「なに！？　警察呼ばれるような大層ヤバイことでも起きるのか！？」

「あんたの耳は何のためについてんだ！　早くこのライフルをどうにかしろって言ってんだよコラァ！！」

「ぬぅぅおぉうッ！？　結城お前なにをする！」

とりあえず男の背負うドラマや映画でもそう見ることのない巨大なライフルを無理矢理引っぺがし、隠せるような場所がなかったので偶然にも近くにあった池の中にぶん投げる作業で数分。返せ返せ弁償しろと泣き喚くおっさんをグーで殴り飛ばして黙らせるのにまた数分。その低脳に銃刀法違反の真髄を教え込ませるのにでさらに数分。

ようやく落ち着くことのできた結城は、はぁぁー、と思いっきり溜息をついてやった。なんかここ数分でとんでもなく疲労が溜まったぜ……。

ていうか本来の仕事より疲れてどうすんのよ……。

「うっ、うっ……ひどい！　オレの相棒を勝手に投げ捨てた挙句、ぶん殴るなんて！　結城のバカ！　もう知らない！」

「ウチの親父みたいなこと言わないでください。気持ち悪いです。大体、いくら俺達は銃刀法が免除されるからって剥き出しで持ち歩く発想はおかしいでしょう……」

「まっ、同じ奴の予備が車に積んであるから良いけど」

「絶対に持ってくんなよ。絶対にだ」

結城達ガードは銃刀法が免除される扱いになっている。理由はもちろん警護のため、いざとなったら命を懸けた攻防戦になることもあり得るため政府から特別に許可が下りている。仮に銃を持ち歩いて警察に捕まったとしても、自分がガードであることの証明さえ出来てしまえばその場ですぐに開放される。むしろガードだと確認することなくとっ捕まえた警察のほうに責任が転嫁するほどだ。

……だからと言って黒光りする拳銃やライフルを剥き出しでホイホイ持ち歩くのもどうかと思うだろう？　しかもガードは世間的に秘密裏の存在。むしろ個人の存在を隠蔽しなければならないのに、銃器なんぞ持ち歩いて目立ちまくったら意味がない。もしそれが重要な仕事の最中だったら敵に自分の存在をアピールして無駄に警戒させるようなものである。

それを承知でバカみたいに巨大なライフルを持ち歩くこの男はある意味ガード失格なのだが……これで結城よりベテランなのだから

不思議なものだ。

「結城……お前は何も分かってない。分かってねぇよ」

「いきなり何ですか……」

「何ってお前、ロマンだろロマン！　男が生まれながらに持つ、ミリタリーへのロマンに決まってんだろ！　太陽の光を浴びて邪悪に光る黒のボディー！　引き金を引くときの緊張感！　そして弾奏を吹き飛ばし、銃口から鉛球を射出！　標的を射抜いた時の高揚感！　お前だって少しは分かるだろ！　この血液に流れて全身に迸るような熱いプラズマが！！」

「いや、分かんないっす」

「ッ～～～、なんでだよ！　やっぱあれか！　お前顔が女みてぇだもんな！　実は男じゃねーんだろ！　じゃなきゃあり得ねーよ何も感じないなんて！　ほぉら確認するから股間突き出しやがれ！」

「テメェ人の股間を当然のように触ろうとするんじゃねーッ！！」

……紹介が遅れたが、このミリタリー馬鹿であるおっさんの名は橘義弘（たちばなよしひろ）。『ジェシータ』に所属してからのガード暦はもう１０年を越えようとしているエリートの一人だ。

一応彼も要人を護るガードの一人ではあるのだが、多少イレギュラーな護り方をするタイプである。

そもそもガードとは『楯』の役割を持つ。が、義弘の場合は『楯』と『剣』を掛け持ちしているのだ。正確には銃。『ジェシータ』に身を置く以前からミリタリーファンだったらしく、ガードになって本物の銃を使えるようになってからはひたすらに銃器の扱いばかり

鍛えたとか。その結果このように生粋のミリオタに成れ果ててしまい、スナイピングをもっとも得意とする異型のガードが仕上がった訳である。
　趣向は少し食い違っていようとも好きなことを仕事に出来ているのだ。よほどのルンルン気分で毎日ガードを続けているに違いない。じゃなきゃこんな頭の弱い人格に育ったりしないもの。

「ったく……それで？　義弘さんが応援のガードなんですか？」

「ん、そうだ。いやぁ仕事から帰った途端の新しい依頼だったから大慌てで来たぜ」

　どうも目の前のおっさんも結城や綾羽と同じ口らしい。報酬貰うついでに総長から頼まれたんだろうな。

「ああ、そうだ結城。お前に一つ聴きたいことがあったんだが……」

「なんすか。人手も揃ったからそろそろ綾羽含めてミーティングしたんですけど」

「いやな……今回の護衛って、一体誰を守るん？」

　とんでもないことを口走りやがったよコイツ。

「なんでだよ！　なんで護衛対象も把握してないんだよ！　あんたどんだけ今回の仕事やる気ないんだ！」

「総長が大急ぎって言うからてっきり銃撃戦にでも飛び込むんじゃないかと思って、ほら見てくれ。弾薬は持てるだけ持って、手榴弾を5個、ついでにスタングレネードまで持ち出してきたんだけどな。

ははっ、無駄だったぜ」

「ははっ、じゃねぇよ！　あんたは何と戦争しにここへ来たんだよ！　んな装備ぶら下げてたらむしろあんたが犯人扱いだっての！」

「まぁまぁ、そう怒んなって。ほらオレ取って置きのプラスチック爆弾あげるから」

「いらねぇよ！！　そんなもんどこで使うんだよ！　えっ、ていうかさっきから何これ？　綾羽には悪いけどこのおっさんと会話してると絶対早死にするって、割と切実に」

もう一度言うが、これでも目の前にいる橘義弘は結城より先輩である。

街中をライフル背負って横断しようが、依頼内容をまったく理解していなかろうが、自作の爆弾を後輩に譲ろうとしていようが、先輩である。

しつこいようだが一応先輩なのである。

「へへっ、褒めるなよ。恥ずかしいじゃねぇか」

「あ、駄目だ。さすがの俺も悟ったわ。これはもう駄目だ」

なんか会話を続ければ続けるほど結城は頭を抱え込みたくなる。実力はともかく、今日一日はこんなのと共に仕事をこなすと考えるとやる気が消沈してしまって気が気でなかった。

「あっ、そういやば……」

義弘は唐突に上着の隙間へ手を突っ込むと、何かを掴んで引き抜

いた。
そいつを結城の目の前に差し出してくる。
「危うく忘れるところだったぜ……ほら、見てくれ」
それは一切れの紙だった。
一辺5センチほどに切られた正方形の紙。紙質はおそらく安物のコピー用紙だろうか。それが何なのか、という話なのだが、奇妙なのはその紙切れに描かれているものだ。
見たこともない怪奇な文字……とでも言うべきなのか。見方によっては何かの図や模様と捉えることもできる。黒のマジックで落書きのかのように紙の中央に描かれているそれが、まっさきに結城の視界に飛び込んだ。
「？　……なんぞこれ？」
結城の口から漏れた問いに、義弘はヒゲの生えた顎を撫でながら眉をひそめた。
「いやな？　ここへ来る最中に拾ったんだが、ちょっと怪しくてよ」
「怪しい？　これが？　ただの紙切れじゃないっすか」
「いや、それはそうなんだが……」　義弘はどうも納得がいかないように、「これ一枚だけじゃないんだよ。観客が大勢集まっているステージ周辺にやたら多く散らばってんだ。見渡しただけでもざっと数百枚はあるんじゃないか？」
「数百枚って……」

「何なら見て来いよ。人だかりで分かりにくいだろうけど、足もと見りゃあすぐ分かるぞ」

俺が来たときはこんなものなかったけどなぁ……と内心思いながらも、結城は半信半疑でステージ脇から顔を覗かせる。

見ると、確かに。義弘の拾ってきた紙切れと同一のものが、やたら大量にコンクリートの地面に散らばっているのが確認できた。無論気づいているのは結城達だけでなく、一般客として赴いている人々もそれに意識が取られ、人によっては手にとってまじまじと眺めている人もいた。

「なんだあれ……。イタズラか何かじゃないんですか？」

「オレも最初はそう思ったんだけどな……。けど、イタズラにしちゃあ無意味すぎるだろ。ただのゴミ――――それも落ちてたところでどうにもならない紙切れだぞ？」

「……掃除を手間取らせるため、とか？」

「セットの片付けはともかく、園内のゴミ清掃は臨海公園側の仕事だろ。わざわざ今日この日、コンサート現場だけにゴミを撒き散らす理由がないだろう？」

「それは……、確かに」

紙切れを拾った人々も、下を向いて気にかける人も、おそらくコンサートの演出の一部か何かだとでも思ったのか。すぐに意識を離し、意識を外へと向けていく。

だが生憎、事前にコンサートの筋書きを聞かされている結城は、あのような演出のことを何一つ聞かされていない。現に作業服を着

たスタッフも紙切れの存在をただのゴミか、または何かのイタズラと思い込んでいるらしい。一瞬気にとめるだけですぐに視線を外している。

結城としては『それがどうした』と一蹴してやりたいところなのだが、こうもあからさまでは現場に派遣されたガードとして多少なりとも気になってしまう。

「誰かのイタズラか、はたまた別の何かか、こうもアバウトな代物じゃ検討もつかねぇな」

「一体何なんでしょうね、これ。まあ、たかが紙切れが落ちてたところでどうともしませんけど」

結論を述べた結城の台詞で、とりあえず紙切れの話題については打ち切ることにした。

所詮は落書きが描かれたただのコピー用紙でしかない。地面に落ちていたところでヘンリー＝マンゼルの護衛にはなんら支障をきたさないのだし、無視しておいても問題ないだろう。

「ところでよぉ、結城」

義弘があからさまに結城の肩に腕を回してくる。顔が近づいて視線だけで答えると、なぜか彼はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべていた。

「最近うちの綾羽とはどうなんよ、ん？」

……何を聞いてくるかと思えばそんなことか。

「どうって、普通ですけど」

「あ？　普通？　ははーん、隠そうたって無駄だぜ」

いや別に何も隠してないんすけど。

「お前、昨日綾羽に飯奢ったんだって？　あいつ帰ってきてから嬉しそうに話しやがってよぉ……オレぁそのせいでカップ麺だったってのに。このこの」

「ただの愚痴じゃないっすか……。確かに綾羽と安いファミレス行きましたけど」

空いた手でこちらの脇腹を握りこぶしで小突いてくる義弘。ほんといちいち言動が暑苦しいおっさんだが、まあこれくらいのことならツッコミ入れずスルーできる結城である。

……次に、このスポンジ頭が口を開くまでは。

「で？　いつんなったら綾羽を嫁に貰ってくれるんだ？」

「ぶふぅ！？　げほっ！　ごほっ！　て、てめ、いきなり何言って……」

「お前今何歳だっけ？　17だったか？　うーん、それならあと1年は待たないとな」

「てめぇ自分が何言ってるか分かってんの！？　え、なに、それ父親が言う発言じゃなくね？　普通主人公の親友ポジション的な世話焼きキャラが場を和ませるときに使う台詞じゃね？　ねぇおかしいよね！？」

「ああ、別に安心していいぞ。オレはそう簡単に娘をやるほど心広

くはないが、綾羽のことをよく理解してくれているお前になら気兼ねなく嫁にやれるからなっ！」

「聞けよ！　話し聞けよ！　清々しいドヤ顔で親指立てられても困るっての！　その歪曲した親バカっぷり何とかしろよコラ！」

「綾羽の奴は存外嫌な様子でもなかったし。あいつは良い嫁さんになるぞ？　飯は上手いし世話焼きだし、一途だし母性は強し……」

「だから話し聞けよ！！」

ぎゃあぎゃあ叫んで義弘に掴みかかる結城だが、生憎このおっさんは話を聞くつもりが毛頭ないらしい。

本気で頭を抱えたい衝動に苛まれた。この父親からあの娘が生まれたのだから、現実はおかしなものである。

「大体！　綾羽とは幼馴染み兼パートナーってだけで、別にこれといって特別な関係って訳じゃ、」

「あ〝あ！？　テメェせっかく綾羽から好かれてるってのに眼中にねぇだとコラァ！！　脳天撃ち抜いてやるから覚悟しろぉ！」

「なんでそこでブチ切れんの！？　あんた一体どこまで親バカなんだよ！！　そもそも綾羽から好かれてるってお前どんだけポジティブな思考回路持ってんだ！」

スタッフの迷惑も顧みずセット裏で取っ組み合いを始めるガード（バカ）2人。

その後、少し遅れて到着した綾羽に土下座させられて長い説教を食らったのは言うまでもない。

◇

午後の４時半頃。コンサートが開幕した。
豪華なセットの中央に歩み出てきた金髪美人・ヘンリー＝マンゼル自身の小さなトークから始まり、合図と共に一曲目がスタート。外人なのだから当たり前だが、綺麗な唇から流麗な英語がリズムに合わせて紡がれ、舞台のスピーカーからはポップな曲調の歌がステージ全体に響き渡っていた。
ヘンリーの歌声に合わせて合いの手やら声を掛ける観客の中――結城は以前の斉藤氏同様、通信機のイヤホンを片耳に刺してそっとの喧騒の中央に紛れ込んでいた。何もしないでぼーっと突っ立っていれば、こういう場面の場合逆に目立ってしまうのではないかと思われがちだが、少し立ち位置を考えれば実際そうでもない。
業界用語では『デッドスポット』と呼ばれる、場の雰囲気、人の視線、物陰によってところどころに生じる完全なる死角。そこさえ位置取りできてしまえば、呆然と突っ立っていても何ら問題はないのである。
ちなみに綾羽と義弘の親子二人は、父親の場合ステージ裏にどんな状況でも動けるよう待機しており、娘は現場から少し離れたスタッフルームの中で愛用のノートパソコンと向き合っている。今頃周辺の監視カメラにハッキングして、こちらの様子を無数の視点から観察しているところだろうか。
準備は万端。何かに狙われている確証もないのにここまでの護衛を雇うヘンリーの気持ちは知れないが、仕事は仕事だ。何が起きても完璧に対処できる自信はあった。

『結局、お父さんとなに話してあんな騒ぎになったの？』

イヤホンから女の子の声が届く。綾羽だ。

数分前、愛用ＰＣの整備と事前の下調べで少し到着に遅れた綾羽が結城と義弘を説教してからというものの、何度か彼女に聞かれている質問である。

結城としては何と答えていいものか分からず、適当にはぐらかすしかないのだが。

「いやちょっと男同士のむさいトークをね」

『男同士って……まあ、話しにくいことならいいけどさ』

実際、なんて言えばいいのか分かったもんじゃない。

まさか『キミの父親が娘を嫁に出したがってる。この俺に』なんてこと言えるわけがない。ちょっと結城のレベルでは攻略不可能だ。

大体、綾羽とは何ら特別なこともなく、仲のいい幼馴染みとして今までやってきたというのに、どうしてあのおっさんは執拗に結城と綾羽の関係をくっつけたがるか。まったくもって理解できない。

……興味本位だが、ここは一つ聞いてみるか。

「綾羽。あのさ」

『ん？　なに？』

「綾羽って好きな人とかいんの？」

『ふぇっ！？』

突如として驚きの声を上げる綾羽。こっちまでビビる。向こうにとってはそんなに衝撃的な発言だったのか、『げほっ、げほっ』とか咳き込んでいるのが耳に届く。

「お、おい。大丈夫？」

『ご、ごめん。平気だよ……』

なにをそんなに驚いたのか知らないが、そんな大声を上げるほどのことだろうか？　と朴念仁の諏訪部結城は首を捻るのだった。

『えっと、質問の意図がわかんないんだけど……い、いきなりなんで？』

「いや、ちょっと気になっただけなんだけど……そこまで動揺するってことはもしかしかして、」

『い、いない！　いないから！　別に結城が思うような好きな人なんていないから！』

「？　別に何も言ってな、」

『とにかくいないったらいないのっ！！』

予想外な否定っぷりである。

ここまで必死になられてはむしろ深い事情を知りたくなってしまうのが人間の佐賀というものだが、まあ、本人がこう言っているんだし実際好意を寄せる相手はいないのだろう。

しかい意外だった。綾羽ぐらいの良心的な女の子なら男友達の一人や二人いてもおかしくないものだが。

「そういや綾羽が男友達と2人で歩いてるところ見たことないよな」
『えっ？　いや、うん。そ、その、み、見られても、困る、し……』
「？　困るって、なんでよ？」
『えっ？』
「えっ？」
『……』
「……」
『……ごめん、結城に期待した私がバカだった』
「はい？？？」

イヤホンの奥からでも、綾羽が呆れた様子で息を吐いたのが分かる。むぅ、まったくもって女心というものは理解しがたいな。解せぬ。

ちなみに、と言っては何だが。結城自信もあまり恋愛だの何だのというのに触れた経験はない。

興味がまったくない、と言っては嘘になるが、少なくともこの現状で恋に現（うつつ）を抜かしていられるほど結城も楽な生活を送ってはいないわけで。綾羽も同じ。つまり、そういうことだ。

『……ああ、そうだ。変な話し振られるから言い逃したじゃない』
ふと綾羽は思い出したように話を切り替え、『ちょっと結城に観

てもらいたい映像があるんだけど。ちょっとそっちに転送するね』

観てもらいたい映像？　と結城が首を捻ったときには、すでに音楽プレイヤー型の通信端末にＭＰ４形式の映像ファイルが送られていた。不思議に思いつつも、言われたままにファイルを開いて再生を試みる。

観れば、それは今この現場――――コンサートのステージを映し出しているものだった。

「これは……？　どこかの監視カメラの映像？」

『うん』

結城の問いに綾羽が頷いたのが何となく分かる。

『結城のいる場所から１０メートルほど離れた先のカメラなんだけど、これは３０分ぐらい前の映像』

「３０分……ていうと、俺がここに到着してステージ裏で待機してた頃かな。これがどうかしたのか？」

『えっと、それがね……。あ、止めて！』

綾羽に叫ばれ、結城は反射的に映像を一時停止していた。なんだよ、と聞き返そうとしたところで……ふと気づく。画面の隅になにやら怪しげなものが写っていたからだ。

「ん……？」

何となく気になってしまい、軽く操作してその隅へ映像を拡大さ

せる。そこに写っていたのは、

『気づいた？』　綾羽の真剣な声が耳に届く。『両手にいっぱいの紙切れを抱えた黒いコートの男が写ってるでしょ？　そいつ、ちょっと怪しいと思わない？』

「……、」

思わず眉をひそめて、さらにその男へ画面を拡大していく。

うん、確かに分かる。画質が荒いため細かな特徴は分からないが、真夏の癖して膝下まである黒いコートを羽織り、ティッシュを大量に掴んでいるかのように小さな紙切れを両手いっぱいに掴んでいるいかにも怪しい男。

ためしに一時停止を解除し、再び再生すると。

男は両手に持っていた紙切れを乱雑に地面へ投げ捨て、そそくさの画面の外へと消え去ってしまった。

『この男、ゴミを撒き散らして何がしたいのか分からないんだけど、ちょっとおかしいの』

「おかしい？」

『このカメラ意外に写っていないんだよ』

「……どういうこと？」

『つまり、上手いことカメラの死角を通っているんじゃないかな……。人影に隠れていたのか、カメラの外からなのかは分からないけど、他の映像ではいつの間にか男のばら撒いていた紙切れと同じものが地面に散らばってる。さすがに変でしょ？』

綾羽の言葉に、釣られるようにして結城は足元に視線を向けていた。そこには無論、義弘とも不思議の思っていた奇妙な文字が描かれた謎の紙切れ。

つまり。

この男が、今地面に散らばっている大量の紙切れをばら撒いていた、ということか？

「……でも、別に気にするほどのことでもないんじゃないか？　義弘さんとも話したけど、いくら地面にゴミが散らばっていても護衛の障害にはならないだろう？」

『まあ、それはそうなんだけど……。ただの一般人が、監視カメラの視界を避けつつこんなことできると思う？』

「……」

そう言われては、確かに頷くしかない。

大量に設置された監視カメラ。その包囲の中からカメラの死角を見つけ出すのは極めて難しいことだ。

今結城が『完全なる死角（デッドスポット）』を見つけて周りの空気に馴染んでいるのにも言えることだが、それらのことは簡単にできる動きではない。監視カメラの場合、周囲にいくつあるのか、一つ一つのカメラが一体どれだけの視野を持っているのか、それらを完全に把握した上で始めて成り立つ。ただの素人が死角を見つけ出そうとしても、探している時点でカメラに写ってしまう。その上死角から死角への移動となると話にもならないだろう。

綾羽が言いたいのはそういうことだ。

結城たちガードでも難しいことを、たかがイタズラ目的の一般人にできる訳がない、と。

『もちろん結城の言うとおり地面に紙が落ちてても支障はないから、本腰入れて調べる必要もないけど……。怪しさだけなら一級品だから。せめて注意ぐらいはしておいてね』

「……、了解」

改めて、結城は地面に落ちている紙切れを一枚拾い上げる。理解不能な奇妙な文字。いや、最早文字なのかも怪しいが……。

どうせ今回の仕事はやることなくて暇な数時間を過ごすことになるだろう。一つ調べてみるのも悪くないかもしれない。

「———綾羽。ちょっと調べてほしいことがあるんだけど」

『なにかな？』

「今からその男がばら撒いていた紙を撮ってそっちに送るから。暇つぶし程度でいいから———、」

言いながら通信端末のカメラモードを起動し、背面にあるレンズから景色が映し出される。

指に挟んで持っている紙切れを撮ろうと、結城はカメラを向けつつシャッターを切る。

———その時だった。

轟ッ！！　と。

どこからともなく現れた、紅蓮の炎が辺り一体を煌びやかに照らし出した。

「……は？」

間抜けな声を上げて、思わず視線を上に向ける。

何かと思った。しかし、思ったときにはすでに遅かった。

視線の先――――そこには、結城や観客、ヘンリー＝マンゼルの頭上ほんの数メートルを横切る、まるで弾丸のように飛翔する炎の輝き。

一直線に突き進むそれはステージ脇に設置された巨大スピーカー目掛けて容赦なく着弾し、瞬間、ドゴォォ！！　という耳をつんざくような轟音が周囲一体に響き渡った。

それが引き金となった。

直後、観客達の悲鳴と絶叫で当たりはより大きな喧騒に包まれる。突然の事態に頭がほうけていた結城も、そこでようやく覚醒した。

「……ッ、何だ、今の……！」

慌てて意識を周囲へ向ける。観客達はミサイルでも突っ込んできたんじゃないかという驚愕の事態に慌てふためき、炎の直撃をくらったスピーカーは大量の熱を撒き散らしつつ轟々と燃え盛っている。ステージ上のヘンリーはその光景を前にして、尻餅をついて呆然としていた。

一体何が起きたというのだ。

火炎放射器？　いや、違う。たかが油で炎を吹き出す兵器で、あの火力と衝撃はおかしい。ミサイル？　それも違う。ミサイルだったら今頃、ここら一帯が酷い惨状になっている。

なら何だ？　今のは一体……、

しかし冷静に状況を分析している暇もなかった。

「ま、また来るぞ！」

誰が叫んだのか。
慌てて振り向くと、再びさっきと同じ紅蓮の炎が熱波を吐き出してステージ全体に襲い来るところだった。しかし、今回は一撃ではない。２つ、３つ、４つ……大量の輝きが上空を照らし、一直線にこちらへ飛来してくる。

「チッ、みんな伏せろ！！」

慌てて腹の底から声を張り上げ、結城は走り出す。行く先は無論、ステージ上のヘンリーだ。
だが、

「うわぁぁあああああ！」
「く、来るなぁぁあ！」

ところどころから響く無数の悲鳴。結城の性格からして思わず振り返ってしまうと、直進する炎の塊が、なぜか途中で軌道を変えてその先にいる男性へ突っ込もうとしている光景を目の当たりにする。

「くそっ！」

男性が幸いにも結城の近くにいた所為か。慌てて伸ばした手が男性の首根っこを掴み手前に引き寄せたおかげで間一髪の救出。
しかし尚も進む炎弾はまたも直進することはなかった。
勢いの落ちていた炎はそのままコンクリートの地面へ落下するかと思いきや、またも先ほどと同じく急な方向転換を起こし、近くにあった仕切りの柵へ直撃した。炎に包まれ、鈍い音を立てながら柵が地面をすべる。
どうなってんだおい……！

流し見で周囲を確認すると、他でも似たような現象が起こっているようだった。
確かに直進していたはずの炎が、慣性の法則を無視してあり得ない方向へと向きを変える。かと思いきやまたも引き寄せられるようにして方向転換。
まるで、そう。
わざと被害を甚大にさせるように、蛇のような動きで荒れ狂うように。

「ふざけやがって！　現実かよこれ！？」

『ゆ、結城！　ヘンリーさんが！』

イヤホンから届く綾羽の声にステージ上へ視線を向けると、ステージ真上に設置された無数のスポットライトに炎が直撃する。
バキッ！　と関節を砕くような音が響いたかと思うと、ライトのガラスの破片が砕け散り、同時に炎に包まれたライトの一つが下に落下しようとしているところだった。
そしてその真下には――――、驚きを隠せずに唖然としているヘンリーの姿。

「ちっくしょうがッ！」

叫び、膝のバネを全力で使い一気に駆ける。ひとっ跳びでステージの上へ転がり込むと、最早体当たりでもしようかという勢いでヘンリーへ飛び込んだ。

「――――――ッ！！」

間一髪。

広げた腕の中にヘンリーの体をすっぽりと収め、しっかりと抱え込み、勢いに逆らわずステージの上を転がる。直後、ヘンリーの座り込んでいた場所にスポットライトが叩き落ちてきた。ガッシャアン！！　と激しく落下し、レンズが砕け、細部のパーツが砕け散る。カーペットの敷かれた木造の床を軽く砕き、深く沈みこんでいた。

「あ、あぶね……。ヘンリーさん、大丈夫ですか？」

「え、ええ……あなたは……」

「俺のことは良い。それより、早く安全な場所に逃げてください」

抱きとめていたヘンリーを放して、立ち上がらせる。見た感じ怪我はなさそうだ。一先ずは安心である。

改めて回りへ視線を向けると、なるほど、ステージの上からだと見え方がまったく異質であった。

荒れ狂う炎。逃げ惑う人々。燃え盛るコンサート現場。

あまりの惨状に内心毒づき、結城はコンサートの範囲として区切られた柵の出口付近、すでに迅速な非難活動を行っていた義弘へと視線を送った。向こうも視線に気づき、こちらに振り向いてくる。目線だけで伝えたいことを訴えかけると、義弘は迷うことなく頷いた。

――――よし、非難に関しては任せて大丈夫そうだな。

結城は傍らに震えて佇むヘンリーの肩に手を置くと、義弘のいるところを指差した。

「あそこのコンサート出口……うちの同僚がいる場所まで走ってください。あそこまで行けばもう安全です」

「だ、だけど……」

「低めの姿勢で走ってください。他の人とぶつからないように注意してくださいね」

何か言おうとしたヘンリーの言葉を無理矢理遮りつつ、その肩を押して前へ進ませる。一度こちらへ振り向いてくるが、すぐに前へ向き直って走り始めた。多少無理矢理だが、こういう場合、情に流されて行動が遅れるより、後先考えずとにかく最善の選択を迅速に行った方が効率的である。

よし、残るは……。

とりあえず危険なステージから地面に降り立ち、通信端末へ向けて声を放った。

「綾羽。今から頼みたいことがあるんだけど……」

『大丈夫』

パートナーであり幼馴染みの声はすぐに帰ってきた。

まるで結城のやることを最初から分かっていたかのように。長年、共に仕事をしてきただけのことはあるってことだ。

『園内の監視カメラ全78箇所のカメラに潜り込んで、今見つけたよ。二人組みの男女……うん、男の方はさっき送った映像に映ってた奴と同一人物だと思う。コンサート会場から離れるように、一目散に走ってる』

「行き先は分かるか？」

『そこまでは……。だけど園内の外へ逃げようとしているのは確かだから、結城は西口へ向けて走って。あたしがなんとかナビゲート

するから』

「了解！」

言うと同時、結城は地面を蹴って走り出す。

狙うべきはただ一つ。この原理不明な怪奇現象を起こした犯人をのみ。

◇

「――――っ、はぁ、はぁ……綾羽、次はどっち？」

『えっと……ちょっと先で右に曲がって。路地裏に入れるから、そこを真っ直ぐ』

綾羽に言われたとおりに、コンクリートの壁に挟まれた路地裏へ駆け込む。

葛西臨海公園から走り出して数十分。すでに結城は園内を抜け、街中を走り抜けていた。街中、といっても古びた家や商店があることから東京の中でも旧地なのだが、なるほど、これなら身を隠すには最適な場所かもしれない、と結城は走りながら分析する。

相当な距離が離れていると思われるため相手の2人組みとやらは追われていることに気づいていないだろうが、念でも入れているのだろうか。こうも古い地へ逃げ込まれると綾羽のハッキング能力が十分に生かせないため……そう、こんなことも起こりうるのだ。

『あの……結城……』

「わかってる。そろそろ潜り込む先がなくなってきたんだろ？」

つまり、綾羽が得意とする監視カメラへのハッキングを利用した目標の追跡（ストーカー）。その基点ともなるべきカメラがこう寂しい地では十分に存在しないのである。

無論、綾羽のことだ。やろうと思えばもっと他の方法で敵を追尾することもできるのだろうが、それにはやはり時間が掛かるのだろう、今時間を要する場合では何の意味もない。

『ごめん……。その代わりって言ったらなんだけど、二人組みの逃走ルートを織り出したから、今からデータをそっちに送るね』

「確実なのか？」

『……８０％はね。今まで走ってきた逃走経路、道の選び方、カメラの避け方……色々あるんだけど、たぶん奴らの行き先はそこから先にある小さな灰ビル解体工事現場だと思う。詳しいことは行って確かめてみて』

通信端末を手に取ると、丁度ＧＰＳのデータが送られてきたところだった。

開くと、綾羽の言う灰ビルまでの経路が表示される。その道筋を即効で暗記してまうと、結城は再び正面へ向き直り足を動かし続ける。地面に転がっていたペットボトルを蹴り飛ばす。

『結城。そこから先はあたしじゃ見れないから音声だけでのサポートになるけど……』

「いや、いい」

『え？』

「ここから先は一人で大丈夫だよ。綾羽は義弘さんの手伝いに向かってやってくれ」

『い、いやでも結城。相手は武器も戦い方も分からないのに……』

「心配すんなって。守る相手がいないだけマシだ。んじゃあ通信切るからな」

『ちょ、ちょっと待って！　またいつもの癖――――』

何か言ってる綾羽を黙らせるように無理矢理通信を切って、イヤホンを外すと端末の電源も落とす。

やっぱり、うん。集中するときはこれに限るね。

綾羽のサポートがあるのもありがたいのだが、やはり結城としては『一人で行動している』という状況の方が心が落ち着く。ＧＰＳデータの示す先も暗記はしたので何も問題はないだろう。

「さて……」

蒸し暑い風を肩で切りながら、視線を上へ向ける。まだ真夏ということもあって空は青い。

時間はたっぷりある。敵を見つけるには十分だ。結城を再び意思を固め、正面へと向き直った。

――――しばらくして、ようやく目的地の灰ビルへ辿り着いた。

なるほど、と思う。確かにここなら身を隠しやすい。一応解体工

事中ということであちこちに無骨なレンガ色の鉄骨が設置されているが、どうも今日が休日ということもあって作業員の姿は見当たらない。
全部で3階建てほどの高さがあるコンクリートの壁が高くそびえるが、どうやら中は床が全て打ち抜かれているらしく屋上まで天井が突き抜けている。合間合間に橋のように鉄骨が架けられていた。
結城は何とか身を隠しつつ何とか中に入り込む機会を窺うが、どうも人の気配が感じない。本当に綾羽の言う二人組みいるのだろうか？

「……」

決して気を緩めることなく、鉄骨の影から影へ、結城は身を隠しながら移動する。
そしてそれは、やはり誰もいないんじゃないかと思い意を決して踏み込んでみようとしたその瞬間のことだった。

「———き、…み……どう、す……———んだ」

ふと、声が聞こえた。

「こ……で、———ぜっ……か…い、を———」

誰かいる。
反射的に脳が判断し、慌てて結城は踏み出しかけた足を引っ込めた。背中を預けている鉄柱の影に全身を隠し、物音立てず、同時に注意深く聞き耳を立てる。
綾羽の予想が的中したことを願い、結城は出来る限り自身の気配を押さえ込んだ。
そして届いてきたのは、男女のやり取りだった。

「――――ふむ、じゃあ僕はもう一度現場へ戻るとするよ。目標の生死も大事だが、回収しなきゃならないものもあるからね」

「……ルーン？」

「ああ。ただのコピー用紙だが、あれでも結構な費用がかかっているんだ」

何の会話だろう、とすぐさま頭が理解しようと必死に回転するが、すぐに無意味なことだと思い思考を止める。問題なのはいつ飛び込むべきなのか、それが重要だった。

「なら私は、ここでディラックの海を展開させて誰も近づかないようにしておくから」

「任せたよ。キミにとっては初の仕事だったろう？　確実に『ヘンリー＝マンゼル』の息の根を止めなければならないからね」

「……うん」

ピクリ、と思わずこめかみが振るえた。

確かに聞こえた。確かにこの耳に届いた。『ヘンリー＝マンゼルの息の根を止める』と。

つまり、答えは一つ。

――――今会話をしている二人組が、あの怪奇な現象を起こした犯人だ。

「じゃあ僕は行くよ。数分したら戻ってくるから」

「ええ。ここは任せて」

聞こえる二人のやり取り。

どうやら男の方がコンサート会場へ戻るつもりなのだろう。奴らの目的が本当にヘンリーの殺害だとしたら、ヘンリーが生きてると知って、またさっきのような原因不明の怪奇現象を起こされては溜まったもんじゃない。

……なら、俺がやるべきことなんて簡単だよな。

ガードとして、仕事を全うするだけだ。

「――ヘンリー＝マンゼルは生きてるよ」

吐息。

同時に俺は、鉄骨の影から姿を現した。堂々と、胸を張って、自分でも分かるくらいの清々しい笑みを浮かべて。

見えたのは、小柄な少女と、カメラに映っていたものとほぼ一致する黒いコートを着た長身の男。２人は突如現れた結城の存在に戸惑っているようだった。

そんな光景を前にして、結城の中で一つのスイッチが切り替わる。

同時に断固たる意思が固定されて――――、

「さぁ、とりあえず捕まえてやるから覚悟しろ」

3：特殊護衛機関『ジェシータ』

……と、自信たっぷりに出てきたのはいいものの。
諏訪部結城は内心物凄く困っていた。
――――どうしよう……いやだって相手2人だし、あんなバカみたいな炎を起こせる超兵器でも持ってたら俺なんて即効丸焦げじゃねぇかコラ！
いや、別にビビってる訳じゃないんだよ？　ビビってなんていないから。戦略的問題でちょっとアレなだけでビビってるわけじゃないから、と顔面ドヤ顔全身冷や汗な言い訳たっぷりの結城であった。

「……」

「……」

そんな結城の思いに反して、警戒心満載な目でじっとこちらを見つめている2人の男女。明らかに異様な雰囲気を持つそれらと視線をぶつけると、嫌でも結城の頭はこの状況を何とかしようと回転を始める。
事実、追いかけてきた身として目の前の二人を捕まえるべきなのは確実。結城はそっと視線だけを動かして、二人の姿をピントに捉えた。
まず一人。男。見た感じ１９０近くの長身を日差しに照らされギラギラと輝く真っ黒なコートで包み、体つきは隠れてよく分からな

い。しかし地毛であろうストレートショートの金髪と、狼のように鋭い目つきの碧眼が存在感を現しており、彼が外国人であることは理解できた。
二人。女。こちらは典型的な日本人らしさが一目で分かるほどの姿だった。腰近くまで伸びる美しい黒髪に、幼さの残る大きめの黒眼がそれを証明している。しかし彼女も隣の男と同じく、ストライプ模様の黒いブラウスの上からクリーム色のパーカーを羽織っており、下はホットパンツ。季節とはアンバランスな格好をしている。
一目見ただけならただの外国人観光客と私服を着た女子中高生程度にしか見えないのだが、明らかにこの二人は雰囲気が違った。何が違う、とは明確にいえないが、確かに他とは違う何かがこの二人からは感じられる。それこそが結城の動きを封じている最大の要因だった。

「……何か、勘違いをしていないか？」

沈黙を破って外人の男から紛れもない日本語が漏れた。
あまりにも綺麗な喋り方に驚くところだが、この現状ではそういう心の余裕を見せることさえ躊躇われる。

「僕は今、隣の彼女に道を聞いていただけだ。これでも日本は初めてでね、気づいたらこんなところにいたよ」

恍(とぼ)ける気か、瞬時に結城は判断した。
男の饒舌は次々と言葉を紡ぐ。

「君が何を言っているのかはよく分からないが、ヘンリー＝マンゼルだの捕まえるだの何のことだか――――、」

「――――ずっとあんたらの事をつけてきた。……そう言ったら？」

ピクリ、と。
鎌をかけた言葉に、男の眉が一瞬震えたのを結城は見逃さなかった。間違いない、今のは確実に動揺した証拠だ。
一気に畳み掛けるつもりで、結城の口は次々と言葉を吐き出した。
「証拠もある。監視カメラの映像であんたらをマーキングして、謎のテロが発生してからここまで走ってくる様子をしっかり把握済みだよ」
「……それで、君は僕達がコンサート会場でテロ行為を行ったと勝手に決め付けて、勝手に捕まえる気かい？」
「へぇ……別に俺、コンサート会場なんて一言も言っていないけどな」
またも男の眉間にしわが寄る。結城はわざとらしく口元に笑みを浮かべた。
確認するようでなんだが、これでも結城は史上最年少のガードである。基礎能力だけならかなりの実力だと自他共に認める。その一つである話術・意思固定能力についてもガードであることに最低限必要な能力なのだ。
「まあ、仮にあんたたちが先のテロ事件にまったく関係なくても、あの現場にいて、タイミングよく逃げ出して、よりにもよってこんな人気のない場所まで来たことは事実だ。少なくとも重要参考人として、この場は拘束させてもらう」
『さ、他に言うことはないか？』と結城は挑発的に付け加えた。
こういう場面で大事なのはいかに自分が余裕の態度を保ち、反し

て相手にどれだけ墓穴を踏ませるか。結城の言葉に、男は少なからずこちらに対する警戒心を増している。———そう、この調子だ。

再び沈黙の幕が辺り一体を支配する。

もう言い逃れは出来まい、と次に男の言葉が発せられるのを結城はじっと待つ。やがて出てきたのは、待ちに待っていた言葉であった。

「……なるほど、どうやら君はただの一般人ではなさそうだ。僕達の行動は一部始終まで監視されていたようだね？」

やれやれ、と男はつまらなそうに口を開く。だがその諦めたような言葉は、同時に結城の言う言葉に観念したことを裏付けているようなものだった。

「同業者……ではなさそうだけど、少なくとも只者ではなさそうだ。この状況どうしようか？」

口ぶりの割りにまったく困った様子を見せていない男の言葉は、隣にいる小柄な少女へ向けられたものだ。少女はチラっとだけ視線で返すと、再び結城に対して視線を戻し———桜色の綺麗な唇が動いた。

「……関係のない一般人に思わぬ現場を押さえられた場合、排除するのが決まりじゃなかったっけ？」

少女の言葉に、次に同様したのは結城の方であった。

排除、と。確かに少女はこんな言葉を言ったか。

「どんな人物であれ、同業者でない場合は『魔術』の存在を知られるわけには行かない。それに関与する恐れがあるなら早めに対処し

ておいた方がいいんじゃない？」

「それもそうか……いや、だけど今もっとも優先すべきはヘンリー＝マンゼルの件だ。ぶっちゃけこんな奴の相手に時間を割いてる暇もないんだが……」

一体何の話をしているのか、まったく意味が分からない。

ただ一つ分かることは、彼らにとって結城が邪魔な存在であるということ。何をするつもりなのか、警戒を怠るわけには行かない。

「なら、予定通りに動きましょ」　少女がキッパリと言い放つ。「あなたは会場へ戻って、私はここに残る。それでいいんじゃない？」

「ふむ、僕は別に構わないが……。君はそれでいいのかい？　彼の対処は全て任せることになるけど」

「いい、大丈夫。もう私は一人前なんだから」

言いながら、少女が一歩、こちらへ踏み込んでくる。

やる気か、と思った。しかしそれ以上に結城が危惧するべきことは男のほうだった。思わず結城は口を挟んでいた。

「……なんだ、戻る気か？　一応言っとくけど、逃がす気はないぞ」

「別に追ってくるなら好きにすればいいさ。無論、」

男は余裕だった。

少女に反して、奴は一歩、後ろへ下がる。そして僅かながら体が沈みこむ。何かを行う前の小さな予備動作。即座に判断した結城は、逃走をさせぬべく飛び出そうとして、

「捕まえれるとは限らないが」

瞬間。

男の体が、８メートル強も上空へ飛び上がった。

「なっ――――」

予想外の展開に思わず目を見開き、足を止めてその光景に見入ってしまう。

男は確かに自身の二の足で遥か上空まで跳び、真上に設置されていた鉄骨の上に着地する。目が合うと、男は不敵に笑みを浮かべて再び圧倒的な跳躍力を見せ付ける。もとはガラス窓でもあったのだろう、すっぽりと壁の抜けた穴から男は外へと消えていった。

ど、どいうことだオイ……。

ずば抜けたど根性を持ってる結城でも、さすがに今起きた現象には唖然とさせられた。

もともと怪しい人間ではあったが、さすがに今のジャンプ力はおかしい。『ジェシータ』の開発部署でリフレクトスーツと呼ばれる人間の身体能力を補強する特殊スーツが開発中だが、その試作品でもあれほどの跳躍力は生み出せない。それをあろうことか人間の生足で、ほんのちょっと勢いをつけただけで再現できるであろうか。答えはもちろん、否だ。

あまりにも奇怪な現象を前にして、炎の塊がコンサート会場を襲った時と同様一瞬頭の中が空白で埋め尽くされる。

ハッと気づいたとき、すでに男の気配は完全に見失っていた。完全なミスである。

「くそ、なんだってんだ……！」

男の行く先はコンサート会場。目的地は把握している。今から追えばまだ何とかなるかもしれないと結城の脳内が信号を放ち、すぐさま後を追いかけようと足を踏み出しかける。だが、

「あなたを行かせはしない」

立ちはだかるのは、無論男と共に行動をしていた黒髪少女だった。少女は結城の行く手を阻むようにして、彼の数メートル前で立ち塞がる。パーカーと長い黒髪を僅かに風で揺らして、悠然とそこに立っている。

「……できれば、綺麗な女の子相手に拳は向けたくないんだけどね」

思わず苦し紛れのキザな言葉を放つが、少女は僅かに目を細めるだけでまったくの無関心らしい。

変わりに返ってくるのは、顔に似合わず冷たい言葉だった。

「どうやらあなたは、私達が思っている以上に変わった人らしい」

「ありがたいね」

「……放っておけば何をしでかすか分かったものじゃない。もし『魔術』に触れられては後戻りできなくなる。確実に邪魔な存在になるわ」

「さっぱりだな。けど、あんたら二人をとっ捕まえて事情を聞き出せば済むことだ」

魔術だの何だの、少女の言葉の節々に理解し難い単語が垣間見えるが、現段階で分かっていることは一つ。彼女は結城を行かせるわけにはいかない。そして結城は、目の前の少女を押し通ってでも先ほどの男を追わなければならない。

ならば互いにとってやるべき事はただ一つ。

少女の口が小さく動いた。

「あなたにはここで――――、消えてもらう！」

◇

開戦と同時、結城は改めて少女の立ち振る舞いを確認する。

見たところ武器はなし。肩の並びも水平であることから、パーカーの内ポケットに拳銃などを隠している可能性も薄いだろう。つまり相手は丸腰と考え突撃するのが最善なのだが、

――――問題は、あいつらの攻撃手段だ。

今さっき起こった男の圧倒的跳躍力を考える。生身の人間とは思えないほどの身体能力だった。コンサート会場を襲った炎の数々を思い出す。現実では考えられない、ミサイルのような質量ある炎だった。

奴らは何かがおかしい。結城のガードとしての勘が訴える。ただの理屈だけで丸腰だと思い込み、先手を仕掛けるのは軽率に思われるのだ。

そんな結城の思惑は、見事的中することとなる。

「『不敬者には懺悔（Confession）を、罪人には業火（Hades）を』――――」

少女の口から紡がれる、謎の言語。
それが一体何を意味するのか、とは思わない。何が起こる、とは思った。
刹那。
ボッ、と。
まるでマッチの火を点けるように、ライターが火を灯すように、だけどそれは確実に周囲の酸素を食いちぎり、そして犠牲として。
少女の両拳が真っ赤な炎に包まれた。

結城はその光景を見て、またか、と驚愕すると同時に内心呆れる自分がいた。
今日一日、やたら不可思議な現象に遭遇するがここまで来ると笑えない。何らかの種と仕掛けがあるとは思うが、あまりにも現実離れしすぎていて度肝を抜かれっぱなしである。
しかし油断している暇もないだろう。
両手が轟々と燃え盛っているにも拘らず少女は火傷すら起こす気配がなく、ダラリと垂らしていた腕が小さく構えられる。
――――と、思った瞬間。

「ふ――――ッ！」

ダンッ、とアスファルトの地面を少女の足が蹴り。
気づいたときには懐に潜り込まれていた。

「はやっ……！？」

それでも尚反射的に動けたのは鍛えられた動体視力があってこそか。

すんでのところで身を捻り、真横へステップ。炎に包まれた、一体どれほどの威力があるかも不明な少女の拳が空を切る。ただそれだけで大量の火の粉が霧のように空を舞い、軽い熱波が結城の肌をチリチリと刺激してくる。

直撃でもしたらただじゃ済まない。本能的に理解した。

（危険すぎるだろ……！）

理解すると同時、大量の冷や汗が吹き出してくる。だが相手はそんな結城を待ってくれるほど生ぬるい敵ではない。

振り向き様、返す拳での一撃。対する拳での二撃が結城目掛けて飛んでくる。危険すぎるため防ぐこともカウンターを狙うこともできない結城は、後退しつつ何とか続く攻撃を避けるしかない。首を捻り、腰を引っ込め、身をかがめる。

一撃一撃が体の脇を通り過ぎ、舞い散る火の粉が降りかかるたびに結城自身に次々とプレッシャーがのしかかってくるようだった。

（くそ、なんとか隙を見つけ出して反撃しないと、ッ！？）

打開策を見つけ出すため必死に頭が回転するが、その一瞬を狙うようにして。

視界の外――――つまり少女の右足が急激に跳ね上がり、結城の顔側面目掛けて振りぬかれた。

事前のラッシュのせいで回避は出来ない。

慌てて少女の足と自身の顔の間に防御用の腕を差し込み、瞬間。

ドゴッ！　と。少女の華奢な足から出たとは思えない、痛恨の衝撃が結城の頭を揺らした。

「ぐぅ……！？」

もし防御が間に合わなかったら、そう思うだけで寒気がする。
予想を越える打撃に思わず足がふらつき――結城の僅かな隙を逃さぬが如く、いつの間にか引っ込めていた少女の右拳が、バシュッ、と空気を突き破る勢いで真っ直ぐに発射された。

「こ、のぉ！」

揺さぶられる視界の中、それでも無理に体を動かし身を屈める。ギリギリのところで頭上を通り過ぎた少女の拳は、結城の髪の毛の先端を僅かに焼き切り、それだけでは留まらず背後に迫っていた鉄骨の柱に直撃。
ベゴォ！！　と破壊的な音が当たりに響き、確かに鉄で出来たそれを深く折り曲がらせた。
結城は慌てて屈んだ体勢から真横へ転がり込み、ほんの5メートルほどだが少女と距離をとる。まるでダンボールのようにへし曲げられた鉄骨を見て、結城は心臓を掴まれているかのような思いにさせられた。
人外的破壊力に鍛えられた動き。

（これは一筋縄じゃいかないぞ……）

とっくに結城の頭の中では危険信号が鳴り響いていた。
いくら正体不明の相手でも、所詮は小柄な女の子だ。僅かながらもなんとかなると思っていた自分がついさっきまで心の奥に潜んでいたが、最早油断は欠片も存在しない。
このまま舐めて掛かれば確実に痛い目を見る。それだけは避けたかった。

「……」

鉄骨から拳を引いて、再び結城の方に振り向く少女。すぐに突っ込んでくる気はないのだろう、冷たい瞳が結城の姿を射抜く。
少女の動きを注意深く捉えつつ、結城は彼女の戦い方に大方の予想を組み立てていた。
おそらく少女の戦い方――――というよりもその体術は、身のこなし、拳の振り方を照らし合わせた結果、どの型にも当てはまらない独自の喧嘩殺法だと思われる。それに加え先ほどの蹴り上げ……出の速さと綺麗な腰の捻りを鑑みるに、カポエラ体術も一部ながらかじってあると考えるべきだ。
説明不能な超破壊力を持つ拳の打撃から、隙を狙って放たれる強力な足技。確かに、かなり考えられた戦法だ。

（でも、どんな戦い方にも必ず弱点がある）

考えろ。戦いとはそもそも、互いの力の差で決まるものではない。周囲の環境と敵の動きを把握できるほどの瞬発的な勘、そして状況判断能力が勝敗を別ける。ただ歴然なる実力では何も決まらない。いかに敵の弱みを握って、どのようにしてそこを突くべきか、それが最も大事なのだ。
今結城に出来ること。敵の強力な一撃を何とか封じ込め、起死回生の一撃を放つことの出来る手札は一体何か。
数秒の沈黙の末、先に動いたのはまたも少女のほうだ。
しかい今回の一撃は飛び込んでの打撃ではない。そう分かったのは少女の腕の動きが、まるで野球のボールをアンダースローで投げるような構えであり、

（って、まさか！？）

風を切って横一閃に振り抜かれる少女の腕。
と同時、まとわりつく炎が手と分離を起こし、それこそ野球ボー

ルを投げ放ったかのように射出される炎弾。まさにコンサート会場を襲った現象と同一のものだ。
結城と少女の合間は約５メートル。
無論、反応できる時間など皆無に等しい。

（ま、ず……っ！？）

直進する炎弾は迷わず結城の下へ突き進む。
目の前に迫る炎。しかし動けない。熱が伝わる。しかし動けない。
もしこのまま直撃したら火傷どころではなくなる。巨大スピーカーを易々吹っ飛ばしたように、結城のような人間程度、一瞬で火だるまにしてしまい生死に関わる重症を負わせられることだろう。
しかし、そこまで分かっていも尚動けない。
この距離ではいくら結城でも避ける事が叶わず、ものの見事に炎弾の直撃をもらってしまう――、
だが次の瞬間、奇妙なことが起きた。

目と鼻の先まで迫った炎が。結城を焼くはずだった炎が。
その場で突如、９０度の方向転換を行った。

「は？」

「え？」

結城と、なぜか炎弾を放った少女でさえ呆けた声を出してしまう。
あの子からしても予想外のことなのか？　そう疑問が湧いた間にも、突如曲がった炎は近くにあった作業用のスコップに着弾し、激しい衝撃と共に容赦なく吹き飛ばされた。
視界の隅でその光景を目にしつつ、結城の中で幾つかの疑問が浮上する。

少女でさえ今、困惑の表情を浮かべた現象。それはコンサート会場を襲った炎と同じであったと結城は思い至る。あの時も、直進していたはずの炎弾が突如方向転換を起こして被害を甚大にさせるという怪奇的なことが発生していた。
どういうことだ？　炎を曲げるのは本人の意思じゃないのか？
しかしその答えともいうべき台詞が、続いて少女の口から出てくるのを聞き逃しはしなかった。

「ま、まさか『ルーン』を持ってきて……？」

ルーン、と呼ばれるものが何なのか、それは結城には分からない。だがそれを聞いた瞬間、今までの少女と外人の男との会話が結城の頭の中でリフレインされる。

『――――ふむ、じゃあ僕はもう一度現場へ戻るとするよ。目標の生死も大事だが、回収しなきゃならないものもあるからね』

『……ルーン？』

『ああ。ただのコピー用紙だが、あれでも結構な費用がかかっているんだ』

回収。ルーン。コピー用紙。
それらが示すものは何だ？　一体何のことを指している？
そのルーンとやらを持っていると、何かが変わる？
それは……、

（――――こいつか！）

ほんの数秒での確証のない閃き。だが、迷っている暇はない。

結城はポケットに片手を突っ込むと、中でくしゃくしゃに折れ曲がっていたそれを引っ張り出す。――そう、コンサート会場でコートを着ていた男が意味も分からなくばら撒いていた、奇妙な文字が描かれた謎の紙切れ。偶然にも持ち帰っていた一枚。

もし結城の判断が正しいとすれば、あの炎は――。

行動は早かった。少女が未だスローイングの構えから動いていない僅かな隙を狙って、結城は初の攻勢に入る。地面を蹴り、猛スピードで突進する。

「ッ！」

しかし、対する少女も反応が早い。カウンターで迎え撃つべく拳を引き、燃え盛る一撃が結城の顔面目掛けて打ち放たれた。

本来ならばここで、身の安全のため回避に走らなければならない。だが結城は横へ跳ぶことも体を捻ることもなく、

真正面から、少女の拳を片手で受け止めた。

燃える炎が止める結城の手へと伝わり、即座に全身を燃やす。紅蓮の炎は命尽きるまで結城の体を燃やし続け、文字通りの灰人を作り出す。

――はずだった。

「そんなっ！？」

少女の驚愕の声が上がる。

突き出された火炎の拳が受け止められたその瞬間――いや、正確には受け止められる寸前に、手を包む炎が完全に消失していたのだ。

受け止める結城の掌には、一枚の紙切れ。そう、コンサート会場でばら撒かれていた謎の文字が描かれ、少女や先の男が『ルーン』と呼ぶもの。

結城の口元には自然と笑みが浮かんでいた。

「……どうやらこの紙切れ、君の出す炎を寄せ付けない性質があるみたいだね」

最早『弱点』は見破った。

「いや、正確には君の炎がこの紙を避けているのか。磁石がプラス同士、マイナス同士では受け付けないのと同じ。理屈は分からないけど、互いが反発しあっているらしい。……会場でもそうだ。炎を反発するこいつを事前にばら撒いて、いざ放った時にわざと撹乱する動きをさせて被害を拡大させる。あとは放っておけば、崩壊したステージに潰されてヘンリー＝マンゼルを殺害することができる。違うか？」

目の前の少女の表情に、初めて『苦渋』の顔が浮かび上がる。

ほぼ仮定でしかなかったが、彼女の表情を見れば分かる。結城の目論見どおりだ。

ここまでが確定事実ならば、もう退く必要もない。

「観念しなよ。これで互いにプラマイゼロだ」

返答はごく単純だった。

結城の不意を突くように、再び繰り出される猛スピードの上段蹴り。しかし二度同じ手でしくじるほど、諏訪部結城は単純な男ではない。

今度こそ確実に防御を構え、空く左手でガシッと迫り来る蹴りの足首を掴み取った。

「この……っ！？」

片手を押さえられ、片足を掴まれ、バランスと重心が不安定になる少女が抵抗の声を放つ。同時に未だ自由な、先ほど炎を切り離した右手で拳を振るってくるが、それは結城の頬に当たってもパシン、という生ぬるい音しか生み出さなかった。
それを見て、結城は笑う。
今度こそ勝利の笑みだ。

「――――重心を失って体の半分すらまともに動かせない状況じゃ、まともなパンチ力は出ないよ」

あとはもう、返答すら待たなかった。
少女に反して自由に動かせる脚を大きく振りかぶり、残る片足を一気に刈り取る。
完全に両手両足を使えない少女は、受け身を取ることもできずに後頭部から地面に叩きつけられた。

◇

「――――ああ、うん。わかった。じゃあおいおい連絡するよ」

言って、結城は端末の通話を切った。
黒髪少女との戦闘から数分。未だ灰ビルにいる結城は壁に寄りかかって綾羽に事の顛末を報告したところであった。
と言っても、少女の行った手品かと思うような炎の出現や、ただの女の子とは思えない恐ろしい身体能力などその他諸々については

省いたが。とりあえず追っていた二人組の片割れを捕まえた、程度の報告である。
ちなみにコンサート会場内の避難はとっくのとうに終わっていたらしい。幸いにも死者はゼロ。軽い火傷や掠り傷が数名いる程度で済んだらしい。何とか無事に一件落着、といったところか。
ただ一つ不安があるとすればヘンリーの下へ戻っていった黒コートの男だが、非難活動も全部終わって、今は義弘さんがヘンリーに着いてやっているらしい。一応あれでも結城より先輩なのだ、おそらく心配は要らないだろう。

「さて……」

通信端末をポケットに入れ直し、チラッと結城は傍らへ視線を向ける。
そこには綺麗な黒髪をだらしなく散らせて、今や気絶している例の少女。
最後の一撃、受け身すら取れずまともに後頭部を地面にぶつけた彼女は、そのまま眠るようにして気を失ってしまった。もしかするとあとで晴れてくるかもしれないが……いやなに、女の子の顔面を全力でぶん殴るよりかマシだろう。勘弁してくれ。
ちなみにこの少女、これからどうなるのかというと。
数十分経てばここに来るであろう手はずになっている綾羽とその他サポートメンバーに引き渡して、そこから身元の調査。大体の証拠が出揃ったらあとは警察へ送還する手順だ。
多少結城の良心が傷つくが、仕事なのだから仕方ない。大人しく迎えを待っているしかできないだろう。

（しかし、事情聴取でちゃんと口を開いてくれるかね。過去に何件か、捕まえたにも関わらず徹底的な証拠が掴めなくて警察まで行き届かなかったこともあるからなぁ）

そう、問題はそこなのだ。
『ジェシータ』のガードはあくまで秘密裏の存在。結城やその他ガードがどう言い張ったって、それが第三者の意見に成り代わることは決してない。あくまで『ジェシータ』は調べる側であり、サポートメンバーがそれらを突きつけて初めて警察送りにすることができる。なんたって逮捕状も何もなく犯人を捕まえたわけなのだから、証拠も何も無しに『コイツ逮捕して』と言っても突き返されるだけなのだ。
まあ、ガードの護衛対象が基本的に有名人であることから、捕まえる現場や犯行現場を多くの一般人や、場合によっては警察そのものに見られているというパターンがほとんどなのであまり心配することでもないのだが。

（……って、待てよ。考えれば考えるほど心配になってきたぞ。このままじゃコイツ、捕まえても何の証拠も見つからずに終わってしまうんじゃないか？）

思わず疑念の思いを込めて気絶する少女に視線を送る。
そもそも、よく考えればコンサート会場を襲ったあの炎をこの少女が放ったという証拠がどこにあるだろうか。臨海公園内の監視カメラに映る映像は、あくまで彼女とコートの男が走って逃げ出すところをおさえたものである。ぶっちゃけ、あの超常現象をこの小柄な少女が放ったといって誰が信じる？　相対した結城でさえ未だ現実感がつかめずにいるというのに。
先ほども言ったが、ガードの言葉――――今の場合結城の言葉は証拠として提示することは不可能である。というかこの事実を突きつけても、取調べのときだけ少女が否定しだしたら結城の虚言として終わる可能性が大だ。そもそも何もないところから炎を出すという行為自体非現実的だというのに。

どちらの言葉が信じられるか。そんなもの一目瞭然である。

（あれ？　今更だけど本気で駄目じゃね？　どうすんのよこの子）

気絶させてなんだが、目の前の少女をどうするべきか本気で悩み始める結城。

まず捕まえるのは無理な気がしてきた。サポートメンバーに引き渡しても、すぐに無実だと思われて釈放。あんな女の子に対して暴力振るったのかと『ジェシータ』内であらぬ噂が流れてしまい、挙句の果てには大量の始末書。あれ、やばくね？

結城の背中に冷や汗が流れ始める。まずいまずいまずい！　正しいことしたはずなのになんで危機に陥ってるの俺！　と真面目に頭を抱え込んでしまう。

しかし、だからといって今ここで逃がすのもどうかと思う。事実この少女が犯行を行ったのは事実な訳だし、ヘンリーの始末だとかなんとか確かに口にしていた。ここで逃がしてはまたも別の機会にヘンリーの命を狙ってきそうで、明らかな危険因子を放置しておけるほど結城も寛大な心ではない。

けれどもそれは取調べが終わり、釈放されてからも同じだ。また共に行動していた男と合流して犯行に及ぶ可能性はいくらでもある。

つまり何が言いたいのかというと、

（詰んだ）

割と本気で。

諏訪部結城、ガードになってからここまで追い詰められた状況も久しぶりである。いやのんきに構えてる暇などないのだけれども。

（綾羽に相談してみるか……？　いや無理だろ、綾羽だって『ジェシータ』の一員な訳だし。何とかしてこの子にヘンリーさんを殺害

しようとする意思をなくしてもらえれば良いんだけどなぁ）

目が覚めたら説得でもしてみるか、と気休め程度の考えが浮かぶが、どうするにしても時間と場所が必要である。今すぐここでという訳にもいかない。

何するかも分からないこんな危険な奴を結城としては野放しにしておくことができないのも事実。

（……うーん……）

そこでふと、名案が思いついた。

何とか彼女を説得するため、時間が必要。『ジェシータ』へ身柄を引き取らせるわけにはいかない。すぐに釈放されてしまうからどう考えても危険。手元に置いておくのが現段階の最善策。

ならば、話は簡単ではないか。

（よ、よし。やっぱり俺天才じゃないか。見てろよオイ）

とりあえず結城は再び通信端末を取り出すと、綾羽へ向けてコールする。

数秒して相手はすぐに出た。

『なに？　結城』

聞きなれた幼馴染みの声を切って、結城は言うべき事柄だけを頭の中で纏める。深く詮索されては面倒だ、早口に結城は答えた。

「綾羽、悪いけど犯人の身柄取引はいいよ。引き返してくれ」

『え？　……ちょ、ちょっと待って。いきなりどうしたの？』

「悪い、ちょっと油断して逃げられちまったんだ。俺は追うから。じゃあまた後で！」

『ちょ、結城？　待ってって――』

ブチッ、と無理矢理回線をたたっ切る。なんだか綾羽に対していつもこんな扱いな気がするが、まあ気にしないで置く。

それよりも傍らの少女だ。綾羽のことだからああ言われてもこの場所まで様子を見に来る程度のことはするはずだ。結城は迅速に行動を開始すると、倒れる少女を軽々と背負う。さっさとここから離れなければ。

「んじゃ行くか。……どうか走ってるときに目覚まして背中からの刺殺エンドだけはやめてくれ」

想像以上に軽い少女を背負ったまま、結城はその場から走り出す。

諏訪部結城人生初、女の子を部屋へ連れ込みます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8586z/

ジェシータの楯

2011年12月27日20時46分発行